雪解けのぬかるみ
大地がたっぷりと水分をふくむ
霧に包まれた林の木々も
芽吹きの〝溜め〟時

荒涼たる大地になぜか心休まる
素朴な暮らしに心が鎮まっていく

「私たちを忘れないで」
ありきたりの別れの言葉でなかった
それを聞いた私たちは、探し続けている
関わり、繋がるすべを

時が移ろうあいまいな日々
言葉があてはまらない季節に揺れている

シャッター以後—1

## 「少女、あるいは光の記憶」

（ベラルーシ共和国のドゥヂチ村：1995 年頃撮影）

表紙写真●本橋成一
文●村石　保

これは、ある記憶のひとコマに違いないという妄想にとらわれていた……。
少女がベンチの端っこに腰掛けているという神聖にして動かし難い構図、あたかも光を紡いでいるかのような少女の手もと、まして、脚が地にとどいていないことに象徴される少女に不可分な不安定さ——まさに記憶としての物語は、そこに宿っている。
写真家がとらえた初秋の清々たる光が創り出すかそけき影——光と影が記憶に転写された一瞬、私たちもまた、私たち自身の記憶を目撃しているのである。

この少女、カーチャは風邪によるアクシデントにより、それからほどなくして亡くなったと聞いた。妹ナージャと村人たちの映画『ナージャの村』を見ることもなく。
はたして、カーチャはあの光降り注ぐベンチで、誰を待っていたのだろうか……。

87 次訪問団

# 私のことを忘れないで

第 87 次訪問団はタイトな日程で、ベラルーシ、ゴメリ州の4病院を回った。事故当時生まれた世代が、出産適齢期に入った今、あらためてチェルノブイリの影響が心配される。未熟児センターでは、赤ちゃんが勢いよく泣き声を挙げていた。この可愛さを伝えたい。

グランドゼロ GROUND ZERO JCF 71 春

## 目　次


**チェルノブイリ　87 次訪問団**
**私のことを忘れないで**

エコー支援
ようやく実現の見込み！＜神谷さだ子＞ 6
役に立つ医療協力をめざしたい＜松澤重行＞ 8
「私のことを忘れないで…」＜国井真波＞ 17

**イラク**
**限りなく続く医療支援**

イラクの現況と JIM-NET の今後の支援＜井下俊＞ 24
限りなき義理の愛「大作戦」＜佐藤真紀＞ 28
イラクの病院への薬品支援報告＜西村陽子＞ 31
事務局のチョコ・チョコ日記 34

**連載**

ナージャの輪通信＜武田裕子＞ 36
連載随筆「１＋１＝１」＜宮尾彰＞ 40
ロシア小話 42
ベラルーシの食卓 44
モスクワ便り 45
振替用紙のメッセージから 46
ありがとうございました！ 48
「ナジェージダ＜希望＞ 2007」募金のお願い 51
トルクメニスタン旅行記＜山口ツォモ＞ 52
出会い　Встреча 60
臨界事故隠蔽と地震＜神谷さだ子＞ 66
原発の臨界事故隠蔽問題 関連記事 68
Здравствуйте！（事務局広場） 70
カルチャー・レヴュー 74
インフォメーション 78


表紙写真　本橋成一
文　村石　保

## 第87次訪問団

# エコー支援、ようやく実現の見込み！

神谷さだ子（ＪＣＦ事務局長）

3月2日から9日、ＪＣＦ第87次訪問団がベラルーシを訪れた。支援品として放射線医学人間環境センター集中治療室へＧ－ＣＳＦ50箱を㈱キリンビール医薬事業部から寄付していただき、持って行った。

◎ゴメリ州立病院付属産院にて出産した子どもをフォローアップしつつ、出産時の問題点をフィードバックしていく。新生児支援の新しい方法での着手は、出発の前日にこの週まで1ヶ月病棟が清掃期間だったと知らされた。3月4日（日）研修から帰ったセルゲイ・コバル先生から未熟児死亡率が、格段に下がっていること等現状を聞く、ミーティングを行った。渡航期間中に戻ってきた家族からインタビューしようと、逐次連絡を取ったが、適わず。やはり、この国での「予定」は未定と思い知る。

◎外務省から委託を受けた「草の根・人間の安全保障無償資金協力」のフォローアップ事業でチェチェルスクとベトカ地区病院を訪問し、供与した機器の使用状況と有効性、地区住民への貢献度などを調査した。夏のメディカル・エンジニアチームの行った機器の稼動調査に基づき、医師と看護師の視点から、有効性や今後への課題について点検・聞き取り調査を行った。医療者の視点ならではの結果報告書を提出できると思う。

◎「ナジェージダ２００６」事業の超音波診断装置をチェチェルスク地区病院に贈る手続きの詳細を詰めた。11月の渡航時にアメリカン・エキスプレス・バンク経由の振込み方法を聞いてきた。帰国後、松本から送金を試みたが、アメリカがベラルーシに対して、経済凍結を行っているので、米国経由は責任が持てないと言われた。そこで、大使館からのアドバイスもあり、ドイツ経由送金することにした。チェチェルスク地区病院にて、院長と経理担当者から、銀行コードなど聞いて帰国した。

チェチェルスク地区病院セルゲイ院長と神谷事務局長

今回の調査でも、血流が見られる超音波診断装置を贈ることは、診断の、よりステップアップに通じることが解った。松本からのテスト送金は難しく、銀行に何度も足を運んだ。地方銀行では責任が持てないと言われ、都市銀行に。もしものアクシデントを見込んだ確認書を書いた。外国為替専門の担当課長からも、長時間の説明を受ける。こうして、もはや…と思いつつあった3月末、「テスト送金が届いた」とコルサック院長からメールが届いた。一年間かかった懸案が、ようやく解決できそうだ。

◎松本市立筑摩小学校6年1組の皆さんからの絵画・折り紙・手紙、アルウィン・スポーツプロジェクト事務局の高橋幸恵さんから布サッカーボールを預かり、チェチェルスク地区病院・ベトカ地区病院・放射線医学環境センターの小児科病棟にプレゼントした。

エコセンター臨床心理士さんにプレゼントを手渡す

筑摩小学校6年1組23人は、国際チーム6人を中心に、チェルノブイリについて学習を重ねている。今回の訪問について話すと、さっそく手作りのミサンガや折り紙のコマ、また1年生から全校生徒に呼びかけて、絵を描いてもらった。23人一人ひとりの手紙も添えて、ベラルーシの入院中の子どもたちに持っていってほしいと託された。折り紙のコマはとてもよく回る。ベトカ地区病院の子どもたちは大喜びだった。

また、事務所を同じフロアーで使っているアルウィン・スポーツプロジェクトの高橋さんが手作りの布サッカーボールをプレゼント。長期入院の子どもたちにとっては、何よりの贈り物になった。昨年から、ドイツの支援で小児血液病棟に入り、子どもたちや保護者のケアをしている心理士のイリーナさんに手渡した。

４病院の整った面、今後補充が必要な面と短期間ながら充実した聞き取り視察ができた。これからも現地ニーズに沿った活動を目指したい。

# 支援と協力
# 役に立つ医療協力をめざしたい

松澤　重之（小児科医師）

松澤医師（左）ベトカ地区病院で

## 2年ぶりのベラルーシ

3月2日からの第87次訪問団に参加しました。私にとっては2年ぶりにベラルーシを訪問する機会をいただきました。今回の目的はゴメリ州における周産期（妊婦と新生児）医療協力としての現地訪問、ゴメリ州高汚染地区の最近の医療状況の把握（外務省から２００５年にいくつかの医療機器が供与されており、それらの利用状況と診療上の問題点を確認する作業を委託されました）などでした。

成田を旅立つ朝は、今年の暖冬を象徴するような暖かく、やわらかい日ざしにつつまれていました。しかし、同日夜半に降り立ったミンスク空港にはひんやりとした深い霧が立ち込めており、「またはじまるぞ」という懐かしい緊張感がよみがえって、背すじが伸びました。

翌日朝、さっそくミンスクから車で4時間のゴメリ市に移動しました。当初の予定では3月4日から、毎日ゴメリ州立病院産院を訪問するという話でした。しかし…「3週間の病棟清掃が（2月中旬から始まっており）5日まであるので、患者さんもわれわれも病院にはいない」という伝言が出発前日になってＪＣＦに入ってきました。以前も何度かこのようなことがあり「またか」といった感じでしたが、急なことで日程調整もままならず、いきなり最初からつまずきました。もっとも私にとっては、本場のサーカスを見学する思わぬ幸運に恵まれ、この地域に住む人たちの文化や生活の豊かさを、またひとつ分けていただいたようなうれしい気持ちになりました。

## ゴメリ州立病院付属産院

ベラルーシの人口は少しずつ減少し、出生率も低下しています。政府も何年か前から母子支援制度をもうけて、健やかにこどもを生み育てるための努力をはじめました（が…）。この産院はゴメリ州の周産期センター的な存在で、1年間に約２５００人の分娩を扱うとともに、出生した新生児に病気があればほとんどすべての治療を行っています。チェルノブイリ事故やソビエト連邦（ソ連）崩壊によってこの地域の周産期医療もかなり混乱しましたが、その後少しずつ医療レベルが改善し、徐々に救命率が良くなっています。しかしそれとともに、命は助かったけれど神経後遺症を残すこどもが増えていることがこの国の新たな問題になりつつあります（以前のグランドゼロにも報告）。

4日はその周産期医療協力のパートナーのひとりである、ゴメリ州立病院産院ＮＩＣＵ（新生児集中治療科）責任者のセルゲイ先生と3時間ほどお話し、最近の状況についての情報収集を行いました。また、6日午後には再稼動し始めた病院の病棟を訪問し、ＮＩＣＵ看護師さんと話したり、未熟児科（集中治療を必要としない状態の小さいあかちゃんを入院治療する）の診療状況を見学し、個々の患者さんの診療について科長のスベトラナ先生とも話すことができました。（参考：日本ではＮＩＣＵと未熟児科を一緒にして新生児病棟や新生児科として運営している施設が多いです。）

まず、この病院における新生児死亡率は10年前に出産10万人あたり12～13人だったのが、この5年で徐々に低下して昨年は約8人になったとの報告を受けました（日本は3～4人）。私が5年前にお話をお聞きしたときは出生体重１５００ｇ未満の新生児の救命の悪さに驚きましたが、彼らが努力した結果かなり良い診療ができるようになっていることを反映する数字だと思います。ＪＣＦから送った機器は治療成績の向上に大きく役に立っていると言われましたが、確かに、未熟児に負担をかけずにこまめに状況を把握できることから、的確に医師が医療的判断を行う上で大きな役割を果たしていると私も思います。

3年前に日本から送った機器について、微量血液検査機器（富士ドライケム）が、試薬が終わってしまい検査が行えなくなっている状態であると相談を受けました。試薬購入費用の問題よりも以前に、試薬を調達できないことが問題になっています。国内にはこの試薬を扱う代理店がなく、旧ソ連（ＣＩＳ）諸国からの輸入は比較的自由なようですが、これらの国ではこの試薬を扱っていません。せっかく

有効に使っていただいた機器をこれからも使っていただけるように、今後の方法について検討することを約束しましたが、事は簡単ではありません。機器や試薬の輸入や持込みが厳しく制限されることは周産期協力以外の医療協力活動にも影響を及ぼしています。

超音波機器は新生児の循環、頭部の画像評価などにうまく使っているようでした。産科では超音波胎児診断をどの程度行っているか、ＮＩＣＵ責任者であるセルゲイ先生から情報が良く伝わってこないことから、胎児の状況について産科医師とＮＩＣＵ医師のあいだの情報交換があまり活発ではない印象を受けました。このあたりのことは、新生児を救命できてもその後の神経後遺症が増加している理由のひとつではないかとも思えます。

ゴメリ州立病院未熟児科

セルゲイ先生の話の中で気になったことのひとつは、チェルノブイリ事故後に甲状腺疾患を発症したこどもたちが出産適齢期に達し、手術を受けて甲状腺ホルモンや抗甲状腺薬を内服している妊婦が多くなってきている、ということでした。また、妊娠中あるいは出産適齢期の女性から、チェルノブイリ事故の影響を不安に思っている相談もかなりあるとのことでした（でも、そのことを妊娠中に気にしてもしかたないこともみんな知っている、と淡々と話していました）。

６日午後、病院を訪れると、やはりまだＮＩＣＵには患者さんがいませんでしたが、未熟児科の病棟には15人くらいのあかちゃんが入院しており、体重１５００グラムくらいの状態の安定している低出生体重児も治療を受けていました。スベトラナ先生とははじめてお会いしたのですが、日本での診療に関心をもっておられました。診療上のいろいろなことを話しあう中で日本との医療の違いを感じておられたようです。この未熟児科はＮＩＣＵと違って、あかちゃんは自宅に戻って生活できる状態になるまで入院しています。ですので、退院後のこと、とくに成長していく中で神経発達についての異常にも配慮がされるようになってきており、小児神経科の医師（退院後のこどもに成長や発



達の問題や心配が出てきたときに主治医となる医師）もときどき未熟児科の病棟を訪れてあかちゃんをみたり医師どうしで話をしているそうです（こういうことが大切です！）。それに対して、横で聞いていたセルゲイ先生が「ＮＩＣＵの私たちは急性期の救命だけが目的」と言い切っていました…。（そうじゃないと思うんだけど、と心の中でつぶやく私でした。）

ところで、この州立病院は3年前から改築を行っています（現在、他の建物を仮の住まいにしています）。改築後は母親のＩＣＵや新生児ＮＩＣＵが増床され、呼吸器やその他の機器も今より少し良くなると聞いています。しかし実際には改築はなかなか進んでいないようです。さきほど国が力を入れ始めている、なんて書きましたが、「母子支援制度」なんて立派に聞こえますが、実際はあまり期待できません（現場の医療者も過度の期待はしていないようです）。このようなことはこの国ではよくあることで、ＪＣＦが初めてこの国に入りこの病院を訪れた時に建築中だった建物は、今でも建築中のそのままの状態です。彼らも「ただ待つしかない」と言っていました。

## チェチェルスク、ベトカ地区病院

５、６日は、ゴメリ州高汚染地区の最近の医療状況について、チェチェルスク地区病院とベトカ地区病院でお話を伺い院内を見学させていただきました。この２つの地区病院は２００５年に外務省から医療機器の供与を受けており、日本大使館から、これらの機器の利用状況や診療上の問題点を確認する作業を委託されました。５日はチェチェルスク地区（ゴメリ市の北、車で1時間弱）、６日はベトカ地区（ゴメリ市の北東、車で30分）を訪問しましたが、どちらの病院も院長、副院長がご丁寧に対応してくださいました。

これら地区病院は、日本でいうと地域市町村の市立病院レベルにあたります。だいたい数万人がその地域に住んでおり、病院の外来受診は1日３００～５００名、入院病床（ベッド数）１２０～１３０床、１年間に約２００名の分娩を扱います。

全体的な感想として、まず、機器の配置を工夫してなるべく多くの医師が同じ機器を上手に使用する点が目につきました。次に、どちらの病院も院長が自分たちの病院の特性と現状を隅々までよく把握していると感じました。「なんでもほしい」「いい物だったらほしい」という姿勢はなく、私が「〇〇のような機器があったら便利ですか」と質問しても、「私たちの病院はこういう状態の人は州立病院に送ることになっているので、このような機器は必要ない。」という返事が返ってきました。（ベラルーシでは州立病院、

地区病院、診療所という施設の階層が確立しており、それぞれの施設が扱う病気の種類や重症度もはっきり区分されています。）

一方、医療機器を使った診療についての問題点を私なりに整理してみると、

（1）機器の不足（超音波機器は妥当と考えられる検査人数の約2倍の患者さんをみている、など）、

（2）所有機器の機能不足（超音波にドプラー機能がないために、心臓病などは病気の存在や病気の重症化を判断しにくく治療が遅れる心配がある、など）、

（3）所有機器の老朽化に伴う問題（新生児用保育器や蘇生ベッドはソ連製の20年以上前に作られたもので、十分な機能を果たしていない、など）、

ベトカ地区病院、集中治療室

の3点に集約されます。これらはＪＣＦからミンスクの日本大使へレポートを提出し、今後できる形での協力を模索しながら続けていきたいと思います。

## ゴメリ放射線医学人間環境センター

7日には環境医学センター（ゴメリ州立病院の小児血液腫瘍科がここに移っています）をたずね、松本市のこどもたち（松本市筑摩小学校6年生）やサッカーチームの人たちから託された絵画、おもちゃ、サッカーボールなどを渡しました。この病棟には、ドイツの医療協力プログラムで病棟専属で仕事している臨床心理士さんがおり、こどもの不安に対応したり、生活や教育のサポートを行っていました。お話しする中で、小児がんのこどもに病気の告知をどうするかなど、日本でもベラルーシでも同じような問題に対応していることを知りました。

### 日本大使館訪問

7日午後、あわただしくゴメリからミンスクに移動し、日本大使館に小池大使を訪ねました。大使のお話はどれも非常に示唆に富むもので、深い洞察力や協力への情熱を感じました。医療協力についても「日本からの支援は減ってきたが、継続してやっているＮＧＯや大学がそれぞれ頑張っていると思います。機器の支援にしても教育にしても、それを行うだけではなく、それが定着し機能するためには



継続してサポートしていかなければ良い支援とはいえないのではないでしょうか。日本からの支援をどうやってネットワークにしていくか（日本からの支援の横のつながり、および、支援グループと支援地域とのネットワーク）、せっかくの日本からの支援が生きていくにはどうしたらいいのか考えています。」とおっしゃっていました。また、「ベラルーシ全体をみると少しずつ経済や生活のレベルは上がっているようにもみえますが、都市部と地域（地区レベル）での格差が大きくなって、政策として田舎は切り捨てということがあるように思われます」と話されていました。たとえば、ゴメリ州高汚染地区は誰も住んでいないと政府は明言しているが、実際は住民が生活しており、大使が視察に行ったとき、住民から言われたことは「私たちを忘れないで」だったそうです。このような地域の住民（とくに高汚染地区）と外部とのコンタクトを維持するか、どのようにサポートできるか、という視点も大切、と大使は話しておられました。

## まとめ

今回の訪問を通じて感じたことをまとめると、

（1）事故後20年が過ぎて、次世代への影響が懸念される時期にいよいよ入っていく、という意識が住民にかなりあると感じました。セルゲイ先生との話の中でも少し書きましたが、出産を控えた女性の中にある事故の影響を不安視する気持ちを、訪問した病院のどの先生も指摘していました。ベトカの病院長先生が「チェルノブイリ事故の人体への影響について、厳密に言えば因果関係があるのは甲状腺がんの増加だけです。でもこれから何かが起こるかもしれない、という気持ちは多くの人が持っています」と話していたのも印象的でした。甲状腺がんの女性から生まれるあかちゃんの健康や、不安を持って生活、出産育児をしていく家族にも注目し、こどもやその家族と関わっていくことも大切ではないか、と思いました。

（2）国内の変化、国外からの物品や情報の制限の動き

物品の輸入について話したように、この国は外国との交流を（それほど極端ではないようですが）制限する方向で動いているようです。医療者が必要とする医療情報の入手や学会や研修への参加なども、ロシアをはじめとするＣＩＳ諸国を除くと、難しくなってきている、とのことでした。政府の中には、「ベラルーシのレベルは高く、何でもやれる」と思っていて、このような交流は必要ないと考えている人もいるとのことでした。今後、医療情報などのソフト面での医療協力が大切になってくるかもしれません。

また、このような外国との間のギャップに加えて、国内の都市と地方とのギャップも静かに進行しているようです。私たちにとっては高汚染地区に住む人たちの生活や医療が気になります。今回訪問したゴメリ州の高汚染地区病院やそれを支える州立病院との絆をこれまで以上に大切にしていくことが、これらの地区に住む人への協力になるのではないかと思いました。

（3）周産期に治療を受けたこどもの神経後遺症の増加への対応（原因の調査と協力）

生まれたあかちゃんの健康を考えるとき、実は生まれる前から状態の良くない場合が少なくなく、それをできるだけ適切にみつけて、（場合によっては出産予定日よりもかなり早く出産してもらっても）早く良い状態に戻してあげることが大切だ、ということがわかってきました（ここでは医師の判断技術とともに産科医と小児科医のコミュニケーションが大切です）。

また、生まれたあかちゃんの病気を診療するときには、「そのときに命を落としてしまう」ということだけでなく「後遺症を残してしまうことがある」ということも意識することがとても大切とされています。この「後遺症」について少々やっかいなのは、大人や大きな子どもの場合と違って、あかちゃんの後遺症というのは「そのとき

小さなガラスのほ乳瓶！もうすぐママのもとに帰ります



（病気が治ったとき）」にわかるものではなく、「その後に時間がたって成長していったとき」にはじめて後遺症があることに気がつく、ということです。1歳～1歳半ごろの歩く時期になって「歩けない」ということがわかったり、あるいは2歳を過ぎて話ができる時期になって「ことばがいえない、わからない」ということがわかって、そこではじめて「出生前後の病気のために後遺症があった」ことがわかってくるのです。だから、周産期への協力がうまくいっていることをみていくためには、急性期（新生児期）の治療がうまくいって救命率が上がることを確認するだけでは50点で、その後の成長がどうなのかを一緒にみて考えて、新生児期の診療にフィードバックできることができて100点になると考えています。

ゴメリ州立病院、スベトラーナ先生

この国ではこの「出産前の胎児の健康状態をしっかり考える」「新生児に治療を受けた赤ちゃんのその後の成長を把握する」という2点が、まだまだ不十分であると感じています。この国の医師たちがそのことを理解し、自分たちでやっていけるようにすることが大切ではないかと思っています。そのためには、私たちがそのモデルを示す（具体的には、医療上問題があると思われるこどもたちの発達を経時的にみて成長の様子を評価していく）ことが協力なのではないか、と私は考えます。

このことと関連して、出生後のあかちゃんは表面的にはのどかにみえますが、実際には母親のおなかの中から外に出て自分で呼吸をして血液の流れ方も変わって…という劇的な変化の中にいます。そのため、この変化の中で起きてくる病気には、他の時期の人間の病気とは全く異なる、あかちゃん特有の疾患が多くあります（日本人医療者であっても、あかちゃんの病気のことをよく知っている人はとても少ないと思います）。このような特殊性をもっていますので、あかちゃんに病気があるとわかって治療を受けるときの家族の不安、治療後の成長を見守る家族の不安、また、NICUや未熟児科で働くスタッフの診療内容や経験にもかなりの特殊性、専門性があります。日本で専門的な経験を積んで見識と興味がある助産師、看護師、心理士といっ

た職種のかたがたにも関わっていただいて、チームとして考えていけないかな、と思うこのごろです。

5年前にはじめてこの医療協力に関わらせていただいたころ、上司である小宮山教授（現学長）が、「おれは医療支援じゃなくて医療協力ということばのほうがいいと思うんだよ」とおっしゃったことがありました。当時はその言葉の意味がよくわからず、とにかく相手と意思疎通を図ることや、目先の結果といったことしか考えられませんでした。でも、関わりを継続する中で、徐々に交流の輪がしっかりできてくるに連れて、「こういうことを相手は困っているのだ」と理解できて協力できるちょっとしたことが増えてきたり、「交流することで私たちにも役に立っている」と感じるようになりました。支援も協力も共感し同じ視点を持って考えることは大切だと思いますが、「支援」は相手のほうが劣っていて、援助によってそれが改善すれば終わり、「協力」は相互にメリットがあり、良い方向に進むほどお互いに良い結果をもたらしあう、といったことなのかなと思っています（小宮山先生の意図したことと同じかどうかわかりませんが）。今回、ゴメリの新生児救命率も上がってきて、自分のことのようにうれしく思い、また、ちょっとホッとしています（まだ50点ですが）。同時に、この協力に関わるようになって、渡航や相手国の医療者の診療、考え方、生活する人の様子などに触れるたびに、自分の診療を振り返って考えたり、日本という国や行われている医療を客観的にみて考えられるようになって、医師として人間としての自分にとても役立っていると感謝しています。

ＪＣＦの活動の理念や医療協力のポリシーを踏まえながら、自分たちの専門性を生かして、相手にとって役に立つ協力を考えていきたいと思います。

終わりになりましたが、渡航にあたってご協力いただきました皆様に、お礼申し上げます。いつもそうですが、この経験を日本の医療にも何らかの形で役立てたいと思っております。今後もこの和の中にいさせていただければありがたいです。どうかよろしくお願いいたします。

ベトカ地区病院院内学級



# 「私のことを忘れないで…」

国井真波（看護師）

ゴメリ州立病院産科、授乳後のゲップ

「私のことを忘れないで・・・」
私がＪＣＦに関わり始めた頃、事務局長の神谷さんから聞いた言葉です。健康診断を行ったベラルーシの村で、神谷さんはある少女からそう言われたと。
その少女はどんな思いでいたのだろうかと、そして今、どんな気持ちでいるのだろうかと、考えずにはいられません。
そして今年は、チェルノブイリの事故から21年。ベラルーシ政府は事故を葬りさろうとし、日本でも事故のことは風化されつつあります。しかし今回のベラルーシ訪問で、「事故はまだ終わっていない」と、強く感じさせられました。

## チェチェルスク地区病院

ゴメリから車で50分のところにある3階建てのベージュ色の病院で、雪解けの季節のため、茶色に濁った雪が道路わきに積もっていました。病院の外には、多くの患者さんらしき人が立ち話をしており、中に入ると、長いすにお互いのお尻をずらしながら座っているたくさんの患者さんが、今か今かと診察を待っていました。

チェチェルスク地区病院は、電灯が少ないのと、窓から陽の光が入りにくいためか、5年前に私が訪れたときと変わらず、凄く暗い感じがしました。

院長室に通されると、そこにはコックさんのような白くて長い帽子を被った、恰幅のいい男性が笑顔で私たちを迎えてくれました。あまりにも気さくで、自らコーヒーを入れていたので、院長のコルサック先生と認識するのに少し時間がかかりました。

チェチェルスク地区病院には、外務省の「人間の安全保障」から提供された医療機器があります。それらがきちんと稼動しているか、何かトラブルが起きていないか、確認しフォローすることが、この病院を訪れた理由の一つです。送った医療機器の一覧表を一つ一つ確認しながら、その機器を実際に操作している検査技師や看護師を交えて、話を

することができました。この病院は外来患者数が多いため医療機器が足りていません。しかし機器に対して医師の数が多いので、稼動させる人手に問題はないそうです。技術的にも問題なく、「操作できる人がいない」という理由で使われていない機器はありませんでした。

全体の印象としては、外来と病棟とで機器を上手く使いまわしており、ないならないなりに自分たちで工夫して仕事をしています。自分たちから「あれが欲しい、これが欲しい」とは、言ってきません。ただ少し気になったことが、チェチェルスク地区病院で使用しているエコーにドップラーがついていないということ。ドップラーが付いていると、血流の向きや速さ、狭窄（きょうさく）の有無などが分かり、内臓や胎児の状態が詳しく分かります。病院内にエコーは4つあるけれど、ドップラーは付いていないとのこと。もしあれば、もっと良い診断ができるのではないかと思います。産婦人科で使用しているエコーにもドップラーがついていないので、エコーで分かるのは、胎児の形くらいです。エコーをするのは1日40人程度。妊婦さんは必ずやるというわけではなく、必要がある場合のみやるとのこと。胎児に問題がある場合は、ゴメリの遺伝研究センターに送ります。この病院でのお産の件数は、年間２００件程度。そのうち約半数がゴメリに送られます。４年前から保健省の命令で、貧血でも送ることになっています。そのうち、中絶するのは年間3―5件。エコーで胎児に問題がないと思っていたのに、生まれたら問題があった、ということはないそうです。その話を聞いたとき私は、「でも、胎児に形態異常が見つかっても、生みたいと思う母親はいるのではないか？そういう妊婦さんに対して、どう対応するのか？」そんな質問をぶつけてみたかったのですが、そんなことが聞ける雰囲気ではなかったので、辞めてしまいました。なぜなら、ベラルーシでは、胎児の異常が見つかれば人工中絶するのが当り前、そんな話を聞いたことがあったからです。

全てを見せてもらったあと、私はコルサック先生に、思い切って質問をしてみました。

「妊婦さんの中に、子どもを産むことを不安に思っている人はいるでしょうか？」

チェルノブイリの事故で、自分は被曝していると認識している女性たちが、妊娠・出産を迎え、そのことを不安に思っている人たちはいるのだろうか？そういう女性たちがいたとしても、彼女たちの声は院長まで届いていないかもしれない。そう思いながらも、院長先生がどう認識しているのか、聞いてみたくなりました。

コルサック先生は、「不安を口にする妊婦さんはいます。そのため、ホールボディカウンターで内部被曝を調べていますし、そういう妊婦さんたちに医者は、食べ物についてのアドバイスをしています。しかしそれは妊娠前から対応しなければいけない問題です。私はそれらについて本を書きました。なので、チェチェルスクには情報があるのです」。

そう言ってコルサック先生は、自分の著書を見せてくれました。果たして、その本の存在を知り、読んでいる女性はどのくらいいるのだろうか？必要としている女性たちにその情報は届いているのだろうか？私の中で疑問は膨れ上がり、アドバイスを受けた妊婦さんたちが不安を消し去ることができているのか、知りたくなりました。

## ベトカ地区病院

ゴメリから車で30分走ると、ベトカの診療所が見えてきます。そこから更に約5分。雪の林を抜けると、真っ白な壁と赤い屋根が見えてきます。ここが、ベトカ地区病院です。到着した私たちを、カッコ良くてキレイな、ナジェージダ院長先生が出迎えてくれました。ここには、「人間の安全保障」から、9種類の医療機器を提供しています。院長自らの案内の下、院内と機器をくまなく見ることができました。送ったものは、トラブルなく稼動しており、使い方がわからない、という問題も起きていませんでした。ナジェージダ先生は決して、「足りないものがある」と、自分からは言いません。しかし、古い新生児保温処置台や吸引器、カテーテル、温度湿度の調節ができないインキュベーターなどを見せられると、「新しいのが欲しいのだろうなあ」と感じました。ベトカはチェチェルスクと違って、性能の良いドップラーがあり、毎年甲状腺の検診を行っています。ナジェージダ先生は、「チェルノブイリの事故の時、お母さんのお腹の中にいた子が、大きくなっています」と。そして「小児甲状腺がんのピークは１９９５年で、その後は減少しています。しかし、今後、ピークという程ではないけれど、事故の時に子どもだった子が大人になったときに、何かしらのリスクが高まるかもしれない」と。ナジェージダ先生はとても聡明で、ご自分の立場をわきまえている方です。先生は科学的根拠を持って述べたわけではなく、「漠然とした不安を感じている」という気持ちを、私たちに分かりやすいように伝えてくれたのだと思います。実際、ベトカでは年々、お産が困難になってきています。妊婦さんの異常が多いのです。感染

症、貧血、甲状腺異常、心臓のトラブル…「チェルノブイリの事故の時の少女たちが、出産を迎えています」と。ここでも、妊婦さんが自分の出産をどう捉えているか、ナジェージダ先生に聞いてみました。「女性たちは事故の事を不安に思っていないと思います。胎児に異常が見つかれば、出産はしません。それに、必要な人には遺伝子診断を行っています」。形態異常の子どもは生まれなくても、発達障害や精神障害のある子ども、心臓や腎臓に異常がある子どもたちは生まれていて、病院で治療を受けた後、地域で生活をしています。

周産期医療について聞く、松澤医師（左）国井さん

ベトカ地区病院の診療所にはリハビリ科があり、またベトカ地区には子どもだけの精神障害センターが今年作られました。そこには精神科医やサイコロジストが所属しています。ナジェージダ先生は話を続けます。「事故の影響で障害のある子どもが増えているかどうかについては、『わからない』」。

ナジェージダ先生の話から、迷いや不安という感情が伝わってきました。「妊婦さんたちに不安はない」と言いつつも、病院では甲状腺がんの検診は毎年行っており、「今後何らかのリスクが高まるかもしれない」とも言っています。先生が感じている不安を、妊婦さんは感じていないと言い切れるでしょうか？そしてそれは、子供を中絶して解決できる問題なのでしょうか？妊婦さんたちの声をもっと聞いて、もし私たちにできることがあれば、それに応えたいと思いました。

## ゴメリ州立病院

ゴメリ郊外から20分ほど車で行ったところにある、少し古びた昔ながらの、しかし中堅どころの堂々とした総合病院。

ＪＣＦがゴメリ州立病院を拠点に、新生児支援を始めてから5年。必要な医療機器や最新の医療情報を提供し、その後のフォローをするために州立病院のセルゲイ先生を訪れました。諸事情により、2年ぶりの訪問。その間にどんな症例があったのか、セルゲイ先生は子どもたちの写真を



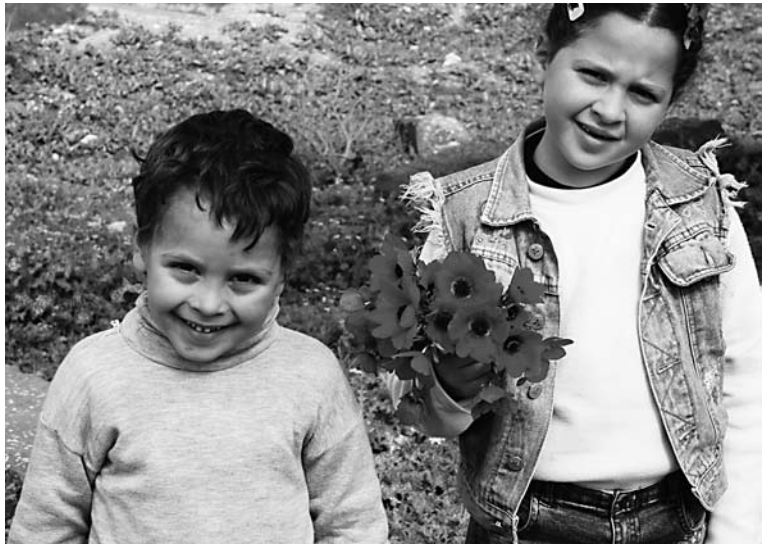
私たちに見せながら簡単に説明してくれました。その中に、両上肢のない子どもの写真がありました。「出産前に異常を発見していたけれど、お母さんがどうしても生みたいというので、出産しました。事故との関連は、分かりません」と。ああ、やっぱり!!子どもに障害があっても生みたいと思うお母さんはいるんだあ!!しかしこの国で、障害のある子どもを産むことを決心し、育てることは、容易な事ではありません。経済的な問題、医療福祉サービスの問題、偏見や差別もないとは言い切れません。そんな中で、全てを受け入れる決心をした、そのお母さんを支えてくれている人はいるのだろうか？社会の中で孤立して辛い思いをしていないだろうか？子どもに異常があろうとなかろうと、「生みたい」という気持ちを尊重し、安心して産み・育てることができる環境をつくるお手伝いがしたい！と、私は改めて思いました。

ベラルーシ滞在最終日、ミンスクの日本大使館を訪れ、小池大使と話をする機会に恵まれました。大使はベラルーシという国を多角的に分析しており、話も分かりやすく、そして人柄も気さくな方でした。小池大使はこんなことを言っていました。「仕事でモギリョフ（高汚染地）を訪れたとき、一人のおじいさんに言われたんです。『私のことを忘れないでください』と」。高汚染地に住んでいる人たちは、国からどんどん切り捨てられているのです。

神谷さんが言っていた、ある少女の「忘れないで」と、このおじいさんの「忘れないで」が、私の中でリンクし、「あの頃と、何にも変わっていないじゃないか！」と怒りと虚しさの両方がこみ上げてきました。ベラルーシに原発を作ろうとしている今の方が、状況はもっと悪くなっているとも言えます。

チェルブイリ原発４号炉の石棺を補強するために、日本政府は５５００万ドルを拠出することになりました。私は一人の日本人として、ただお金を出すだけでなく、今後のチェルノブイリを見届ける義務があると思います。そして国益のために切り捨てられようとする事故の被害者や、これから生まれてくる子どもたちの為に何ができるか常に考え、実行していく必要があると思います。原発事故と健康被害の因果関係を証明することが困難になり、そして人々の関心が薄れている今必要なのは、専門家だけでなく、一般の人たちの協力なのだと思います。「専門知識は何もないけれど、チェルノブイリのために何かしたい」という普通の人たちの、底上げの力が、これからどんどん必要になってくるのではないかと思います。チェルノブイリはまだ終わっていないのです。

## イラク
# 限りなく続く医療支援



ＪＩＭ―ＮＥＴアンマン事務局を守る西村に、イラクの医師からの懇願が届く、「来年度はうちの病院の薬の予算はあるのか？ぜひ、薬の支援を続けてほしい。ＪＩＭ―ＮＥＴの支援なしではやっていけない」と…。イラクに暖かな春がやってくるのがそう遠くないことを祈りつつ、2007年度もがんと闘うイラクの子どもや医師たちを支え続けていきたい。

### ゴメリ州立病院、ＮＩＣＵの看護師さん

マリナさんは看護師長で35歳。看護師になって15年。ここのＮＩＣＵ（新生児集中治療科）は10年目。アンナさんは看護主任で31歳。新卒でこの病院のＮＩＣＵに就職し、11年目。二人ともベテランです。まず、いつもの業務内容について話を聞いてみました。

1、赤ちゃんの体をきれいにする。
2、レスピレーターをきれいにする。
3、赤ちゃんにミルクをあげる。
4、バイタルチェック、モニタリング
5、ドクター指示の治療
6、記録、申し送り

ベラルーシの看護学校は3年生ですが、ＮＩＣＵの看護師の大半は大学で生物学などの勉強をしており、技術も高いです。

ＮＩＣＵに配属するときも一定の基準を設けており、誰でも勤務できるわけではありません。病院内でＮＩＣＵの位置づけや、そこでの看護師の役割が高いからです。

ＮＩＣＵで勤務している看護師は、5年ごとにトレーニングがあります。期間は約半年。ベラルーシは6つの地区に分かれていますが、地区ごとにコースがあります。

ＮＩＣＵに勤務するということは、小さくて重い命を預かることになるため、その分ストレスも多いです。特に700グラム以下の子どもを看護するときのストレスは大きいです。低出生体重児を出産したお母さんは、自分を責めてしまう傾向にありますが、そんなお母さんのフォローも大切な看護の一つです。

私はお二人に、「ＮＩＣＵの看護師をしていて、良かったと思うこと、辛かったことの具体的エピソードを聞かせてください。」と聞いてみました。しかしマリナさんが、「う～ん、難しい質問だわ（笑）」と、結局答えていただくことができませんでした。お二人が普段どんなことを思いながら働いているのか、ストレスを溜まったときはどんな風に解消しているかなど、自分の場合と比較してみたかったのですが（私もかつてＩＣＵにいたので）、やはり初対面であることと、面接風の雰囲気が漂っていたせいでしょうか。突っ込んだ話ができなくて残念です。また次回訪問したときに、お話を聞くことができたらと、思っています。

マリナさん、アンナさん、子どもたちのためにこれからも頑張ってくださいね！

# イラクの現況と JIM-NET の今後の支援

2月26日から3月9日までヨルダンおよびクウェートに滞在して得られた情報、および今後のＪＩＭ―ＮＥＴの活動の展望を伝える。イラクの国内情勢は厳しく、今後も予断を許さない状況が続くだろう。イラクの混沌に、イラク戦争を支持した国々は責任がある。当然ながら我々にもその責任がある。彼らの状況が少しでも良くなるよう、困難な状況であっても今後も活動し続けねばならない。

井下　俊

バスラのジナーン医師とアンマンで打ち合わせる井下医師

## イラク国内の状況

ＪＩＭ―ＮＥＴは抗がん剤を中心とした緊急医薬品支援を継続している。アンマンに長期滞在中の西村の尽力により、この1年で総額５０００万円程度の医薬品をイラクの医師たちの下に届けることができた。２００５年度は２５００万円程度であったから、医薬品支援は倍増していることになる。これもＪＩＭ―ＮＥＴの活動に賛同していただいている各団体や、バレンタインデーにチョコを買ってくださった皆さんの暖かい援助のおかげである。しかし、倍増したからといって喜んでいられるわけではない。なぜならＪＩＭ―ＮＥＴの医薬品支援は、イラク政府が安定した薬品供給を担えていない結果だからである。

報道されているように現在のイラクは内戦状態であり、政府機能はほとんど失われている。本来ならば医薬品や医療器材はイラク政府が供給の責任を負うべきであるのだが、南部バスラでは政府からの支給は皆無であり、点滴セットや使い捨ての注射器すら供給されていない。バグダッドの病院でもおおよそ必要物品の1割程度しかイラク政府から支給されないとのことである。1年前よりもさらに状況は悪化している。

無政府状態ゆえの治安状況の悪化から、イラク国内の移動も困難になっている。今までバグダッド周辺からバグダッド市内のセントラル小児教育病院や子ども福祉教育病院などへ通っていた患者たちはバグダッドに近寄ることができず、遠方の北部モスルや南部バスラのバスラ産科小児科病院に流れているそうだ。このため、バグダッドの子ども中央教育病院では患者数は半減し、セントラル小児教育病院では3割程度の患者減少が生じている。一方でバスラやモスルでは患者数が増加しているとのことである。今までよりも遠方に通うため定期的通院ができず、初期治療に成功した患者でも必要な維持療法ができずに放置していた結果、再発をし、手の施しようのない状態で再診する患者も増えているとのことだ。

## イラクからの出国

イラク国内が極めて危険な状況になっているとともに、イラク国外でもイラク人にとって厳しい状況が続いている。ヨルダンではイラク人の入国は制限されており、パスポートやビザになんら問題がなくとも入国拒否されるケースが昨年から増えている。今回、クウェートでイラク南部地域の医療復興に関する会議があると聞き、その会議に参加するためにクウェートに行った。しかし、１０００人程度参加する予定だったイラク人医師たちのほとんどにクウェート政府からのビザは発給されず、数十人のイラク人医師がその会議に参加できたに過ぎなかった（発表予定のイラク人医師の演題を大幅にカットせざるを得なくなり、そのためにＪＩＭ―ＮＥＴの活動について発表する時間を与えてくれたのは、ＪＩＭ―ＮＥＴとしてはひとつの収穫であった）。国内は危険極まりなく、国外へ出るのも容易でない状況が続いている。

## ＪＩＭ―ＮＥＴの今後の支援

今までほぼ半年毎に開いていたアンマンでのＪＩＭ―ＮＥＴ会議を今回開かなかった理由は、イラク国内の情勢悪化とその隣国ヨルダンでのイラク人の入国拒否である。イラク国内での移動に危険が伴うのに加え、招待してもヨルダンに入国拒否される可能性があった。イラク人医師たちにリスクを負わせてまで会議を開く意義があるかどうか、疑問に感じたため今回の会議は開かないことにした。そのような状況でもイラクへの支援は続けなければならない。イラクの小児がん医療復興のために、いかなる支援をなすべきか検討するためにアンマンとクウェートへ飛び、会えるイラク人医師たちと会合をもった。先に書いたイラク国

内外の状況は、それらイラク人医師から直接あるいは間接的に聴取したものだ。

## ○薬剤支援

イラク保健省が十分機能していない現在、緊急の薬剤支援は継続せねばならない。イラクに残って小児がん医療に携わる医師たちは「患者が病院へ来る以上、危険があっても私たちはイラクに残り病院へ行く。それで命を落とすことがあっても神の思し召しであり悔いはない」と、声をそろえて言う。そんな彼らに薬を届けないわけにはいかない。リスクを冒してもイラクにとどまり、診療を続けている彼らに薬が届かなければ絶望するばかりである。今までと同様の薬剤援助を、イラク政府が機能回復するまで継続せねばならない。恒常的に過不足なく抗がん剤などが供給されるようになるまで、どれくらいの年月が必要なのか予想は困難であるが、2、3年のうちには抗がん剤などの緊急支援はせずに済む状況になることを望みたい。

## ○臍帯血バンク（幹細胞貯蔵施設）

長期的な支援の取っ掛かりとして、「臍帯血バンク」がある。ＪＩＭ―ＮＥＴのホームページにも載せられ、昨年2月には新聞でも取り上げられているものだ。進展がなく、どうなったものか不審に感じていた方もいらっしゃるかもしれない。決して忘れているわけではない。内戦状態のなかでそのような大きなプロジェクトを進行させるにはリスクが高く、現地の医師にとっても壮大な夢見物語よりも抗がん剤が欲しいという現実的な要求が強いため、一時中断していたプロジェクトだ。今回の出張で、２００９年春にバスラに新しい小児病院がいよいよできそうだとの情報を得た。その新しい病院の院長などに会い、病院の一角に臍帯血バンクにも利用できるような血液幹細胞の処理・貯蔵のための施設を設けてくれないか交渉を行ってきた。「臍帯血バンク」からややトーンダウンした印象があろうが、決してそうではない。血液幹細胞の処理貯蔵施設というものは幹細胞移植に必須のものであり、それができないと自己末梢血幹細胞移植（移植治療の最も初歩的な技術と考えてください）もできない。日本の臍帯血バンクも、日本各地にあった幹細胞の貯蔵施設が集合し、バンクができたのである。将来のイラクの医療進歩のために、臍帯血バンクの原型となるような設備を2年後を目途に何とかできないかと模索している。金銭面など考慮せねばならない問題点も多いが、現在ＪＩＭ―ＮＥＴが援助しているバスラ母子



病院の医師たちもその病院ができればそちらに移るとのことだ。彼らとの関係を持続させ支援を継続させるためにも、少しでも進展していくように努力したい。

## ○バスラ院内学級とイブラヒム先生の活動支援

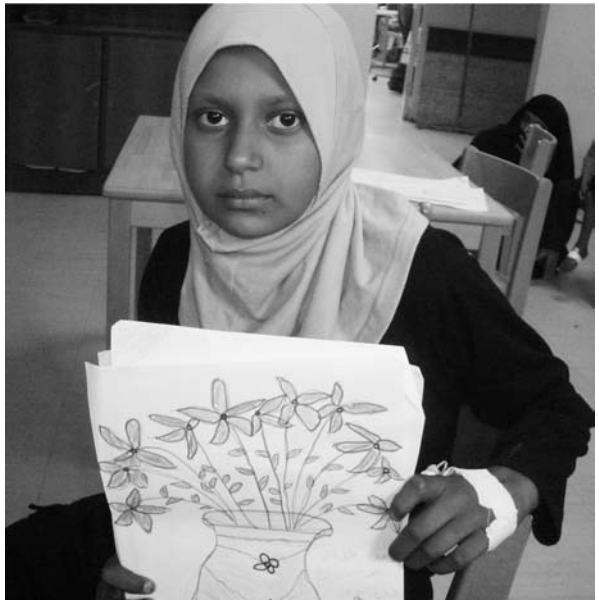
もうひとつ、バスラで続けられているイブラヒム先生の院内学級である。決して医学的な進歩をもたらすような援助ではないのだが、彼の働きはすこぶるよい。今回クウェートで彼に会い、彼の仕事ぶりをレポートしてもらった。彼は院内学級の先生として小児がんの子どもたちに教えているばかりではない。貧しくて交通費も支払えない子供たちには自宅までタクシーで迎えに行き病院に通わせたり、死期が迫った子どもたちに「怖がらなくてもいい」と勇気づけたりしているそうだ。宮沢賢治の「雨ニモ負ケズ…」の世界を実践している。

彼はイラク政府から支給されない医薬品や点滴セットなどのバスラ市内での買い付けもし、ＪＩＭ―ＮＥＴのバスラ産科小児科病院への援助の担い手となっている。医師たちの信頼も厚く、子どもの教育だけでなく患者や医師たちの精神的支えともなる活動を続けている。ＪＩＭ―ＮＥＴでは、イブラヒム先生を介して、ささやかな額ではあるが患者個々への経済援助も実験的に行っている。治療費が無料でも、病院に通う交通費や宿泊費が賄えず治療を諦めるケースがバスラではバグダッドに比べ多数いる。そのような子どもたちへの経済援助も、イブラヒム先生に危険が生じない程度に継続していけたらと思っている。

イブラヒムが、がん患者の家庭を訪問、よろず相談に乗るのも重要な仕事

# 限りなき義理の愛「大作戦」

佐藤　真紀（ＪＩＭ―ＮＥＴ事務局長）


ハウラ・ジャーメル　10 歳は、サマワの女の子。300km かけて病院へ来る

湾岸戦争のときのアメリカ軍の攻撃は、「砂漠の嵐」作戦。１９９８年の、アメリカのイラクへの空爆は「砂漠の狐」作戦。アフガンへの侵攻は、「限りなき正義」そして、２００３年のイラク戦争は、「恐怖と畏怖」作戦。こういった仰々しい作戦の裏で死んでいく殆どは、一般市民であることに、私はどうも引っかかりがありました。

そこで、私たちは、がんの薬をヨルダンからイラクに送る日常の業務にも、仰々しい作戦名をつけてそういった人を殺す作戦に対抗することにしたのです。「冬のカキ氷」作戦、「サンタの穴あき靴下」作戦そしてバレンタインにちなんで「限りなき義理の愛」作戦でした。日本政府がイラク戦争を積極的に支持した結果、イラクでは復興も進まず、戦争の状態がもう４年続いています。それなのに、関心は薄まり支援は減っています。

しかし、日本では、バレンタインの期間のチョコレートの売り上げは５３０億円にも上るそうです。また、年間のチョコレートの８割はこの時期に売れるというのですから、少しでも、イラクの子ども支援にそのお金をまわして欲しいと、僕たちも昨年からチョコレート募金を始めました。子どもの絵をデザインしたカードを作り、チョコレートと一緒に袋につめて、義理チョコを作ってみたところこれが予想外の評判で５千口の募金がありました。今年は、さらに予想を上回りなんと、前年の４倍の２万を越えました。まさに、限りなき義理の愛「大」作戦になりました。

今回の絵は、すべて院内学級のがんの子どもたちが描いてくれたものです。６枚のカードをデザインするのは結構大変だったのですが、最後の一枚に選んだのが、ドゥア・ハッサンちゃん９歳の絵でした。

彼女はいつもお花の絵ばかり描いていて、それがとっても素敵だったのです。白血病の子どもは約３年間の治療が必要ですが、イラクの病院に薬があれば、患者さんへの負担はありません。しかし、病院に薬がないと患者の家族が町の薬局で買ったりします。ＪＩＭ―ＮＥＴは、病院に必要な薬を届け、子どもたちが病院に来さえすれば治療が受けられるように支援しています。しかし、ドゥアのように貧しい家庭だと、病院に行くための交通費も捻出することができません。そこで、ＪＩＭ―ＮＥＴが車代を出したり、生活費の保護を出しています。ともかく、生きて欲しいと願いをこめて、ドゥアの絵を一生懸命デザインしてみたのです。

この作戦がまさに始まろうとしていた１月２日、バスラの病院で院内学級の先生をやっているイブラヒムからメールが届きました。ドゥアがなくなったというのです。彼女

バスラのドゥア・ハッサン　非ホジキンリンパ腫をわずらい 07 年 1 月 2 日他界

は何回も注射をしているので、血管が固くなってしまい薬もうまく入っていかないといっていました。そして、最後は出血が止まらず、体中が内出血で紫色になって、死んでいきました。イブラヒムが送ってきた亡くなる数日前の写真のドゥアは、満面の笑みをたたえています。どうして、こんなに素敵な笑顔ができるんだろう。

２月14日、バレンタインデーのその日から、米軍は、イラク軍と合同で、治安維持の大規模掃討作戦を開始。街中には、かつてないほどのチェックポイントができました。ＪＩＭ―ＮＥＴは、ヨルダンで薬を調達し、できるだけ目立たないように、小さな袋に入れなおして病院に届けています。チェックポイントができたおかげで、車量が減って、普段よりはスムーズに薬が送り出すことができているようです。バスラには、日本から調達した薬を私がクウェートまでもって行き、イラクのドクターにクウェートで手渡し、国境まで見送りました。そこはかつて湾岸戦争のとき地獄のハイウェーと言われた道で、敗走するイラク軍の戦車に劣化ウラン弾が撃ち込まれたところ。そのときの放射能でいまだにがんで苦しむ子どもたち。そして、そろそろ03年のイラク戦争の劣化ウラン弾の影響が出始めているかもしれません。対向車線には、米軍の戦車が列をなして引き上げていました。国境には米軍基地がありますが、すぐむこうはイラク。ドクターは、しっかりと薬を抱えてバスに乗り込みイラクに戻っていきました。子どもたちの薬代は一日４００円。甘いチョコレートが苦い薬になって、イラクの子どもたちに届きます。人間の記憶はすぐに忘れ去られますが、劣化ウランの半減期は45億年。私たちの作戦は限りなく続きます。

車窓から見えた米軍戦車の列

ロアイ・カリーム・カードム　10歳　2002年から白血病の治療中
先日、マーケットで車にはねられて怪我をした



# イラクの病院への薬品支援報告

**西村　陽子**
（アラブの子どもとなかよくする会
ＪＩＭ―ＮＥＴアンマン事務局）

ＪＩＭ―ＮＥＴからの薬品支援は命綱

３月に入ってヨルダンには青空が戻ってきた。今年は雨の少ない、暖かな冬だった。去年より早く花の季節がやってきたようだ。

昨日、バグダッドの子ども福祉教育病院の医師から「ここ1、2週間で患者数が増えてきた」という話を聞き、ほっとした。なぜなら、この3ヶ月ほどバグダッドの治安の悪化に伴って、患者が病院に来ることができなくなり、患者数が半減したと聞いていたからだ。２月末からの〝掃討作戦〟が一時的に功を奏してか、それまでに比べると安定しているとのことだった。しかし、道路沿いには兵士や戦車、装甲車が並び、チェックポイントがいたるところに設けられ、「まるで軍事基地の中にいるようだ。少しでも手を緩めたらたちまち元通りの地獄になる」と言う。イラクにはまだ春の兆しが見えない。

２００６年度、ＪＩＭ―ＮＥＴはアンマンを拠点に、バグダッド、モスル、バスラにある４つの病院の小児がん病棟に医薬品、機材の支援を続けてきた。イラク北部の都市モスルにあるイブン・アシール教育病院（２００７年１月にイブン・シーナから移転）のがん病棟では、今までバグダッドで治療を受けていた患者がバグダッドの治安悪化や宗派対立によって遠路はるばるモスルまで来るようになり、患者数が激増した。南部のバスラ産科小児病院でも同

じように、バグダッド近郊からの患者も受け入れるようになったが、ベッドが足りず、床にマットを敷いて化学療法を続けている状態で、公休日である金曜、土曜も医師や看護スタッフが交代で出勤して対応にあたっているという。最も治安状況の厳しいバグダッドのある医師は「毎日定刻に出勤すると誘拐や殺害の危険が高いのはわかっているが、毎日出勤している。戦闘の最中に子どもを連れてくる親がいたので、なぜ、こんな危険なときにやってきたのかたずねると、母親は、家でじっとしていたら子どもはがんで死んでしまう、子どもを救うには命がけでも病院に連れてくるしかなかったと答えた。こういう患者がいる限り、病院を離れることはできないし、せっかく来たのに薬がないから何もできないなどとはとても言えない」と語った。また、他の医師は「銃声が聞こえると、家族は病院に行くなと引き止める。しかし、自分がもし死ぬようなことがあっても、それはアッラーが定めた日であり、受け入れる準備はできている」と言う。これらの病院では治安の悪化で患者が定期的に通院できないために、治療が中断したり、かなり悪化してから病院に連れてきたりするため、再発や症状の進行で手のほどこしようのないケースが非常に増えたという。「治安さえよくなれば、治療も今までのようにできる。すべてがよくなると信じている」と同僚が次々と病院を去る中、一人奮闘するセントラル小児教育病院の医師は語った。この病院には1月下旬にセルセパレーターのフィルターなどの消耗品約3ヶ月分を送った。「イラク国内には同じような型のセルセパレーターがイラク戦争後、何台かイラク保健省を通じて病院や血液バンクに設置されたが消耗部品がないために稼動しているものは1台もない」という。そんな中で、この病院では1、2月で約10ケースの血小板採取を行うことができたそうである。また、医師やスタッフが思うように通勤できないため、ＪＩＭ―ＮＥＴの招聘によりアンマンで研修を受けた医師が病院内で研修会を開いて、セルセパレーターを動かせる医師や技師を増やす計画があるとのことだ。

２月初めの時点で、これらの病院へのイラク保健省からの医薬品の供給は需要の10パーセント程度、または、ゼロということであった。保健省の倉庫に薬があっても、周辺の道路を歩く者がみな無条件に撃たれるという危険な状況で受け取りにいけない、あるいは、輸送中にトラックが襲われて薬が奪われたり、輸送の途中で横流しにあったりして、病院に届くことがない…という。そんな中でＪＩＭ―ＮＥＴから薬の支援は命綱だと言う。アンマンを拠点に、メールや電話でイラク国内の医師たちと連絡を取り合い、要請に応じて、月額平均して３００万円を越える抗がん剤

モスルの白血病患者

や抗生剤などの医薬品を陸路や空路でイラク国内の４つの病院に送ってきた。多い時には2日に一度、危険を回避するために小分けに梱包した荷物がアンマンからイラクに向かう…。「病院からわずか数分の道のりにある倉庫の薬が届かない中、ＪＩＭ―ＮＥＴのヨルダンからの薬は、一本たりとも紛失することなく病院に届いている」そう言って喜ぶと「アッラー・カリーム(アッラーはすべてを知り、守ってくれる)」…現地の協力者たちは会話の終わりに必ずこの言葉を使う。

「3月は日本では年度のしめくくりなので忙しい」と話すと、きまって「来年度、うちの病院の薬の予算はあるのか？ぜひ、薬の支援を続けてほしい。ＪＩＭ―ＮＥＴの支援なしではやっていけない」と、どの医師からも新年度に向けての要望が出される。

イラクに暖かな春がやってくるのがそう遠くないことを祈りつつ、２００７年度もがんと闘うイラクの子どもや医師たちを支え続けていきたい。

## 「限りなき義理の愛作戦　2007」事務局のチョコ・チョコ日記

　今年のバレンタインデー・ホワイトデーはどんなふうにお過ごしでしたか？　チョコレートといえば、JIM-NET のチョコレート募金。ここでは、1 月から 3 月にかけての事務局の様子をご紹介します。

〇「札幌の絵画展とチョコ募金が好調です！」
そんな第一報をもらったのは新年明けてすぐのことでした。
〇やはり同じ頃、電話が何本も入ってきました。
「新聞を読んで、お電話しました。募金をしたいのですが…」
こんなふうに「限りなき義理の愛作戦 2007」は始まりました。
ところが、さっそく予定を大幅に上回り、チョコ絵本が足りなくなりそうです。慌てて増刷を決定しました。

〇1 月 20 日・21 日。JIM-NET 初の関西イベントで、京都・大阪に行ってきました。その前々日くらいにはメールや電話が入ってきました。
「京都で講演会があるそうですが、お手伝いしたいです」
あぁ、なんてありがたい。何人ものお申し出をいただき、講演会は無事終了しました。またこれがきっかけで絵画展企画が決まりました。
〇松本に戻ると、注文もどしどし入ってきます。
「お友達がやっているブログでこの企画を知りました。ささやかながら私も参加したいので、よろしくお願いいたします」
　そうなんです、このチョコ募金、ブログなどで紹介してくれている方がたくさんいるのです。

〇「1 月も残りわずか…。そろそろ次のチョコレート発注しなくちゃ」
どんなに忙しい時期も六花亭からはチョコレートがきちんと届きます。
「□△新聞ですが、取材を」「△□テレビです」
今年は昨年にも増してマスメディアからの取材がたくさん入ります。

〇「イラクをはじめ世界中で、困難な状況の中、小さくも健気に光輝いている子供たちに心を痛めています。チョコレート絵本での募金を、4 口申し込みます。子供たちの為に有効に使っていただけたらと思います」



〇松本では絵画展「院内学級で出会った子どもたち」がスタート。
ベラルーシとイラクの子どもが描いた絵が並びます。会場では 1 枚ずつ真剣に見入っている人が多く、「この子は今どうしているの？」と気にかけてくださる方が多かったです。

〇2 月に入って、なんとなんと電話が鳴り止まなくなってしまいました。
新聞の反響でした。中には 1 ヶ月近く何度もトライしてくれた方も。。。
バレンタイン用に用意した絵柄がほぼ無くなり、ホワイトデー用に用意していたものも使い対応させていただくことになりました。そんな訳でホワイトデー篇はずいぶんと数が限られてしまうことになってしまいました。
疲労困憊の事務局にはお見舞いを兼ねて、袋詰めを手伝ってくれる方もいて本当に救われたのでした。

〇「バレンタインまであと 1 週間。発送ペース上げなきゃ」
朝に夕にクロネコヤマトの担当さんにはお世話になりっぱなしです。
また申込期間を過ぎてどうしても 14 日までにチョコ絵本を入手したいという方もいて、各地でチョコ絵本をイベントで扱ったり、お店に置いてくださった所へ駆け込んでもらうということも。
〇申込だけでなく、多くのメッセージにも励まされて毎日が過ぎていきます。
「毎年、義理チョコを渡すことは、意味のないことで、今年からは辞めようかと思っていましたが、このような取り組みであれば、ぜひ参加させて頂きたく思います。わずかな小さい小さい力ではありますが、子供たちのために、役立てて頂けるならば、とてもうれしく思います」

〇「バレンタインまであと 5 日」東京から増援が来ました。事務局があまりのパンク具合で、多くの方に「チョコは 14 日までに届きますか？」というご心配もかけてしまったのでした。一番嬉しかったのは、予想していた 2 倍以上の支援をイラクに送れることです。残念だったことは、今回参加を希望してくださった方々の期待に十分には添えなかったことです。
〇初夏には今回募金してくださった方、全員にキャンペーン全体のご報告をしていきます。　　（ＪＩＭ―ＮＥＴ事務局・小森）

# アトミック・サバイバー
# ワーニャの子どもたち

武田裕子
（ナージャの輪）

昨秋我が家に、読売新聞社から『ＪＣＦ、読売新聞の国際協力賞受賞式』出席招待状が届き、びっくりしてＪＣＦ事務局に電話をしました。

３年ほど前からフルタイムの仕事が舞い込み、しかも勤務先は東海村。仕事内容は、直接、原子力関係ではないにしろ、現地に暮らす人とのつながりは、今までになく、その色合いが濃いものとなったのは当然のこと。隣町住民という立場のみであった以前は、脱原発の会主催の学習会などにも時間がとれれば参加していましたが、この3年間は、職場内でその関係の話題になった時に「疑問」の姿勢を見せる事さえも、自分から控えました。時折ナージャの輪の仲間から届く学習会資料にも、家に持ち帰った仕事をこなす毎日の中、ゆっくり目を通す心のゆとりもありませんでした。責める人など誰もいないのに、何にもできない自分をふがいなく思い続ける、そんな3年間でした。

そして『招待状』…。

電話口の神谷さんは、いつものようにやさしく軽やかな声で、「いいのよ。これから先、何かできれば…。みんなでお祝いしましょう！」と、こともなげに言うのです。聞けば、これまでにＪＣＦにいろいろな形で関わってきた方々が、たくさん集まるとのこと。

そして11月1日、晴れの祝いの日。たくさんのひと、帝国ホテルにＪＣＦの輪ができました。なつかしい松本の方々。以前、スライド「ナージャ希望の村」を一緒に制作したメンバー、埼玉、京都の仲間とうれしい再会。たくさんの再会の中で、映画「六カ所村ラプソディー」の監督、鎌仲ひとみさんとお話することもでき、映画のチラシを何枚かいただきました。まさか、この出会いが神谷さんの言う、「この先、何か…」につながるとは思っていませんでしたが、次の機会はすぐに訪れました。

教員をしていた旧友から「急なんだけど演劇の演出をしている教え子が、原子力関係の劇を2月公演に向けて考えているので、できる範囲でいいから相談にのってくれる?」と、連絡があったのです。演劇の事はまったくわからないし、私にできることがあるのかなと思いましたが、とにかく直接話を聞いてからと、本人に電話をしました。にしすがも創造舎というところでレジデンス演出家をしている、阿部初美さんという若い女性でした。話をすれば、私たちがスライド制作でお世話になった写真家の大西さんとも、以前から仕事関係で顔見知り。昨年4月のＪＣＦ東京集会にも参加したそうです。（しかもグランド・ゼロも手元に）。「六カ所村ラプソディー」は、今回の演劇の柱にもなる出会いだったとか…。つながっている、人の輪、想いの輪…。電話口で話す阿部さんからは、まだ会ったこともないのに、なつかしささえ感じました。そして2月に行われる『東京国際芸術祭２００７』で、一般の人に伝わりにくい原子力施設の現状、そこで働く労働者のことを演劇にしたい、という真摯な思いがひしひしと伝わってきました。

４、5日後には、反原子力茨城共同行動の根本がんさんのお力をお借りし、急きょ我が家で、被曝労働者の現状を知るミニ学習会となりました。夕暮れ近くなってから東海村の原子力研究所（原研）の方に出向き、海岸沿いから、解体工事の進んでいる東海原発一号炉のある建物を眺めました。

阿部さんは、我が家に来る以前にも、役者さん達と一緒

東京国際芸術祭 2007『アトミック・サバイバー』（C）松嶋浩平

に六カ所村にも行かれ、その後、福島原発の方にも出向き被曝労働者について取材し、東海村の原研に勤めている若い女性に直接話を聞く機会もあったそうです。

そして2月、にしすがも創造舎で上演された、構成・演出：阿部初美、ドラマトゥルク：長島確『アトミック・サバイバー　ワーニャの子どもたち』へとつながります。

初日より反響は、日々うねりのように大きくなり、毎日新聞に掲載された記事にも後押しされ、私が舞台を見に行った楽日前日には、前売り券は完売とのことでした。

劇の内容は、パンフの言葉をお借りすれば、「各地の原子力発電所のフィールドワークをもとに、核エネルギーを生み出すパワーの源を〈あかるく〉照らすポストドラマ演劇」。

世の中すべて、機械化、自動化、瞬時化が当たり前であるかのように進む現代。そんな中、手作りのミニチュアセットを役者さんたちが手で動かしながら、ウラン運搬から原子力施設内で行われている作業、廃棄物運搬まで、淡々と、子どもにもわかるようにその作業が舞台で再現される。同時に舞台上でカメラマンがその作業が追い、舞台後方の大画面に映し出される。今観ている舞台の光景が、映像化、拡大化されることで、なんだかミニチュアセットとわかっていながら、実写にも見えてくる。途中、上演に先立ち取

東京国際芸術祭 2007『アトミック・サバイバー』（C）松嶋浩平



材された、六カ所村の現地レポートなども、映像に折り込まれている。劇中で、案内役をしているユニフォーム姿のお姉さんは、なんだか東海村の科学館、小学生が見学した時にやさしく説明してくれるお姉さんに似ているような気がしたけれど…。この辺になると、〈あかるく〉コミカルに進んでいる劇が、妙に現実味を帯びてきて、「ドキッ！」としてくる。そして、反対でも賛成でもなく、幕は閉じる。休憩なしの、密度の濃い二時間。

写真展「link - みんなのひかり -」も展示されていた。演劇終了後、その写真展に出展した若者の一人と話をした。「上演前に、どうしてもウラン採掘現場のインドへ行きたくなり、写真を撮ってきた。現地で作業している人たちには、危険性さえも知らされていない。危険だと知っているのは、現地管理職の人と都会に住む高学歴の人ぐらい」。若者を、突き動かした現実。原子力の問題は、ウラン採掘から廃棄物処理まで、何処をとっても関わる人が被曝しているという事実を、あらためて、本当に忘れてはいけないと思った。

原発立地区近くに住み、その地での「暮らし」を営む人の思いを考えると、心の中では叫んでいるのに、「反対！」と声に出して言えないのまた、事実です。思いおこせばJCO臨界事故の直後に「ナージャの村」を那珂町で、その後、東海村で「アレクセイと泉」の上映会を企画した時も、同じような想いを抱えた仲間は、みんなで声にならないこの言葉を映画に託し、訴えたかったんだと思います。スライドの制作の時も、そうでした。

専門的な、緻密なデーターをもとに理論的に考えることも大切なことですが、こと原子力の問題は一般人には難しすぎる…かと言って、難しすぎるという先入観で、知ろうとすることさえも手放なされては困る…その時にこそ、映画、写真、音楽、文学、絵画そして演劇…人の感性によって生み出されたものの、もう一つの可能性。美しさを感じる心を育てるだけでなく、真実を伝えること、真実を知ろうとする心を育てること…。知識・情報としてだけでなく、物事を「五感」を使って考えると、命の視点から知ろうとする心を育てるのではないか…阿部さんとの出会いで、あらためて感じたことです。

今回の演劇上演後、演劇関係者からも、原子力の問題を長い間考えてきて下さった方々からも、各地で世代をこえて、再演希望の声が寄せられているそうです。いろいろな表現を通して考えるきっかけができ、たくさんの人と出会い、共感できるのはうれしいことです。新しい広がりを願い、そのささやかな手助けぐらいなら私にもできるかな、と想いは膨らみます。

# 1＋1＝1

NO.27

宮尾 彰

新しい年の初めから、一つの家族を巡る不幸な事件がありました。二十一歳の兄が一歳下の妹を惨殺したのです。彼自身は予備校生、妹は劇場にも出演する短大生。祖父の代から続く歯科医の家庭で、上の兄も歯科大生。

勝者と敗者の二者からなる競争社会の縮図のような家庭です。『まるで、二人の子どもを同時に喪ったようです』という、両親の痛ましいコメントも報道されました。このばらばらの家族が、私たちの住む社会を象徴しています。

ちょうどこの事件がニュースになった頃、以前仕事でお世話になった保健師のNさんと久しぶりにお会いしました。

「乳幼児検診、成人病予防、精神障害、老人介護…。業務がそれぞれの担当に分けられたシステムの中で仕事をしていると、自分がかかわる相手の一生をトータル（全体的）にとらえられなくなってゆくような気がするんです。」

彼女のつぶやきは、事件が私たちに与える不安とどこか深いところでつながります。

同じ屋根の下で暮らしていながら、隣にいる家族が何に悩み、何を夢見ているのか、お互いに分かち合えない。病気や障害や老いを局部的に取り扱うほど、それらを抱えながら営まれている個人の生活が見失われてしまう。

お互いに関心の無い親子兄弟が何人並んでも、そこに家庭は成り立ちません。私たちの生活から、病気や障害や老いを個別に取り出すことはできません。

ばらばらの部分をいくら集めても、全体にはならないのです。

私は彼女に「1＋1＝1」という不思議な数式について話をしました。これは、ロシアの映画監督タルコフスキーの作品『ノスタルジア』で、或る登場人物が住む部屋の壁に彫りつけられてある文字なのです。



学生時代にはじめて見て以来、私は長い間この謎めいた数式の意味を考え続けてきました。

最近、私は自分がようやくその答えにたどりついたように思います。

僕と君、私と貴女は違うからいいのです。違うということは、どんなにすばらしいことか、違えば違うほど、そこには、もっと深くかけがえのないものが生まれるのです。違ったまま、かけがえのないまま、一つであることは、どんなによいことでしょう。違えば違うほど、一つになるのです。違うことが深ければ、もっと深く一つになるのです。だから一つになることには限りがありません。

「かけがえのないもの」　押田成人

あるがままの相手を、心から認め、受け容れることは、決してやさしいことではありません。それはむしろ、自分の思い通りにならない、時間と忍耐を要する作業です。

いつの頃からか、私たちはこの手間のかかる人と人とのかかわりをわずらわしく感じるようになり、やがて巧妙に省略するようになりました。この国で、家庭の崩壊や教育の荒廃が叫ばれ続けて、何年が経つでしょうか。

私たちの社会に本当の絆が回復するためには、お互いにかかわりを持たないことで保たれている見せかけの平穏さが、一度破られなければならないようです。

「違ったまま、かけがえのないまま、一つであること」。いろいろな部分が、その違いを含みながら一つの全体を成しているすがたを、押田神父は「円居」（まどい）と呼びました。「1＋1＝1」は、そのあきらかな徴なのです。

# АНЕКДОТ

◆ Утром первого января жена говорит мужу:
- Помоги мне сделать уборку после праздника.
- Не могу. Голова раскалывается, руки трясутся.
- Вот и хорошо! Тогда вытрясешь все коврики и половики.

◆ Для западного менталитета главное - достижение поставленной цели.
Для восточного менталитета главное - процесс достижения поставленной цели.
Для русского менталитета главное - постоянное обмывание процесса достижения поставленной цели.

◆ Как выяснилось, самые популярные вопросы после прививки:
Мужской: - Можно ли выпивать?
Женский: - Можно ли мыться?
Отсюда вывод: основная проблема женщины в том, что она грязная,
основная проблема мужчины в том, что он трезвый.

◆ Товарищи клиенты, уважайте своего менеджера. Ведь вы видите перед собой одного дурака, а он целую группу!

◆ - Папа! А зачем ты женился на маме?
Муж поворачивается к жене и говорит:
- Вот видишь, даже ребенок удивляется!



ジーマの

# ロシア小話

◆元旦の朝、妻は夫に命令する。
「祝いパーティの後片付けを手伝ってよ」
「それは出来ない。ひどい頭痛だし、手が震えるし」
「よかった！それは、全ての部屋とカーペットとドアマットを振ってほこりを払うには丁度いいわ」

◆西洋のメンタリティにとっては、一番重要なのは、提起目標の達成である。
東洋のメンタリティにとっては、一番重要なのは、提起目標達成の過程である。
ロシアのメンタリティにとっては、一番重要なのは、提起目標達成の過程を常にお酒で潤すことである。

◆予防接種をうけた後、一番多く聞かれる質問例が公表された。
男性の場合は、
「お酒を飲んでいいですか？」
女性の場合は、
「お風呂に入っていいですか？」
となると、女性にとっての肝心な問題は、本人の体が常に汚いかどうかになる。これに対して、男性にとっての主要な問題は、本人が常にしらふの状態にいるかどうかである。

◆販売店で、
お客の皆さん、目前の店員を尊敬してください。あなた達はその人と対面するとき、自分の前に一人の馬鹿しか見ていませんが、彼は常に馬鹿のグループに接しているのですから。

◆「お父さん、あなたはなぜお母さんと結婚したの？」
夫は妻の方を向いて言った。
「ほら、うちの子供でさえ驚いているよ！」

――ストレリツォフ・ドミートリさんよりのアネクドート―――

# ベラルーシの食卓

## 黒パンとカモミール

レストランのテーブルにつき、オーダーが済むと、まず、パンが運ばれてくる。
乾燥しないように、布ナプキンがかけられている。配慮とは裏腹に、手に取った黒パンのスライスは、パサパサとして硬い。「ここの朝ごはんは、パンは下から取っていくんだよ」と同行したドクターのアドバイス。黒パンはライ麦を酵母発酵させ、焼いている。独特の酸味がある。日本のフワフワパンと違って、体にも良さそう。

第 87 次訪問団は、3 月 2 日真夜中にベラルーシに到着した。通関チェックも無く、楽に外に出ることができた。ミンスク中心地まで、明るい街路灯が灯っている。ベラルーシは変わっていく。豊かになっていく。天然資源が無いために、この冬、ロシアからのガスや石油の値上げ宣告があったときは、大変なことになると心配した。少しずつ豊かになるのが実感されるが、何の産業があるんだろうと皆で不思議に思っていた。モスクワ事務局のイリーナさんが、「ベラルーシは、トラクターと大型バスの生産が盛んです。モスクワのバスはほとんどがベラルーシ製です」と教えてくれた。

私は、件の黒パンが大好きである。ロシアの人たちは非常食として、乾燥させた黒パンの切れ端を携帯して旅に出る、と聞いた。ところが、今回の訪問時に、ゴメリのツーリストホテルで黒パンは見られなかった。食べることができなかった。

代わりに、毎回テーブルに盛られるのは、白パンとヒマワリの種がトッピングされたアンパンサイズの黒パンだった。少しカモミールの香りがして、とても美味しい。そして、やはり健康的な気がする。

でもやっぱり、あの黒パンを食べたい、と思う。
いつの日か、あの大根飯が健康食として食膳に出てきたように、素朴な黒パンも特別オーダーでなければ、食べられなくなるのだろうか。

**簡単に作るカルトーシカ（じゃがいも）**

**＜材料＞**

ビスケット　２箱・牛乳　大さじ２・ココア　大さじ４・マーガリン　大さじ２
・胡桃　好みで２袋・バニラエッセンス・ブランデー

**＜作り方＞**

1 . ビスケット・胡桃を細かくつぶして混ぜる。
2 . 鍋に牛乳・マーガリンを入れて温める。
3 . ココアに温めた牛乳を入れてよく練る。
4 . 鍋にビスケットと胡桃を入れよく混ぜ、バニラエッセンスとブランディーを加える。
5 . 小さい団子状に丸めて、ココアをまぶす。



# モスクワ便り

ロシアは、自国―ソチで 2014 年の冬季オリンピック開催しようとしている。昨年夏、国際オリンピック委員会は、ソチが、オーストリアのザルツブルグ、韓国のプサンと並んで、候補地に含まれていると公表した。ロシアは、二度冬季オリンピック開催の権利を得た。1998 年は公告があったが、棄却した。国は、複雑な経済状態―デフォルトだった。
2002 年は最後まで残らなかった。にもかかわらず、この年は、招致が決まると信じられ、お祝いの看板の印刷が早めに始まっていた。

ソチ―それは、黒海沿岸の有名な保養地です。おそらく、かつてのソビエト連邦で、この町で生涯に一度も保養しなかった人はいないでしょう。
ここの魅力は、海から、砂浜から 30 分の所に山があります。そこは有名な山スキーコースがあります―「クラースナヤ　パリャーナ」と呼ばれています。ここでは、冬にはほとんど風がなく、スキーに適しています。

今年の 2 月、ソチで国際オリンピック委員会の代表による共同記者会見が、猪谷千春副代表と共に開かれました。

「ソチの売りは、確かに、魅力あるものです。冬季オリンピックは、この時期雪のある国で行われるのが、普通です。ところがソチでは、棕櫚（しゅろ）が生え、同時にすぐにスキーコースに行ける。黒海、高い山々、海岸―私は、このような所を見たことがない。－猪谷千春さんは強調した。－このことからも、ソチはとても適している、と。

2014 年には、クラースナヤ　パリャーナでは、12 の新しいゲレンデとコースが開設されることが明らかになっている。町の収容能力は、25000 人。保養地ソチの発展に国家予算、1200 万ドルが当てられている。2014 年のソチオリンピックの安全を守るために、54000 人の警察官が別個に準備されている。

数ヵ月後に、私たちは、どの国がオリンピックを招致し、客を招聘するかわかるでしょう。それが、ロシアであり、皆さんが 2014 年ソチにオリンピック選手団をつれて来られることを願っています。

イリーナ・ニコラエワ（モスクワ事務局）

# 振替用紙のメッセージから

◎ベラルーシの子どもも、イラクの子どもも、そして日本の子どもを含めた世界の子らの上に平安を！

◎いつもありがとうございます。国の内外、心の波立つことばかりですが、出来ることをやっていくしかありませんね。心ばかりですが、お役立て下さい。

◎内戦化しているイラク、２００７年こそ平和と希望がありますよう心から祈っております。

◎子ども達の瞳がくもらないように平和な世界を祈ります。

◎『週刊朝日』毎週拝読しております。チェルノブイリの子供達イラクの子供たち、ひとりでも元気に大きくなって欲しいです。もう少し若くて持病がなければ現地に行ってお手伝いしたいです。どうぞお元気で新年を迎えられるようにお祈りしております。

◎一昨年クリスマス会をきっかけに長男が『婦人之友』にのっていたこちらへ寄付しました。去年は母（私）今年はその話を聞いた三男が私と一緒に小遣いをためたものを全部貯金箱から出して献金することにしました。

◎年一度だけのささやかなお手伝いです。イラク、ベラルーシの子供達にも一日も早い平安を。

◎僅かですが戦争と放射能汚染への抗議をこめて、役立てて下さい。

◎活動が着実に広がり、より強いものになっていくのを感じうれしく思っています。微力ながら支えます。

◎「ロシア・チェチェン戦争と子どもたち」読ませていただきました。子どもたちの犠牲。ほんとうに悲しい。悲しい想いをしている子どもが世界中にどれほど多くいることか…心して目を向けてゆきたいと思います。

◎イラクは今、最悪の状況ですが、一人でも多くの子供達に未来と希望があるという事を知ってもらい、又そうなる事願っています。



◎御苦労さま。憎しみのない地球にしたい。

◎現地の病院の子供達が描いたクリスマスカードが届き、思いがけないクリスマスプレゼントを頂いたようで胸が熱くなりました。ありがとうございました。

◎北朝鮮からもアメリカからも核がなくなり世界から戦争がなくなり、平和を守るために核を持つという考えがなくなりますように。

◎クリスマスカード届きました。点と点が糸で結ばれた気持ちです。来年は少しでもよい方向に向かっていきますように願っています。

◎ベラルーシから子どものクリスマスカードが届きました。何とうれしいことでしょう。机の上において、飽きずにずっと眺めています。子どもたちの未来を守るために私も精一杯がんばりたいと思いました。

◎赤貧年金生活でどことも脱会していってますが、いわれなき病の子どもたちの美しい瞳を見るとそれもできず…。

◎毎年クリスマスカードありがとうございます。一年中飾っています。

◎岡本佳央さんの記事を読み感動しました。「どうしたらその方らしい生活ができるか」このことをもっと日本の政治家、医療従事者、そして自分を含め多くの人が考えなくてはいけないと思っています。若い岡本さんからのメッセージ、強く私には届きました。

◎『ひまわり』を聞きながら伝え続けていくことの大切さをかみしめています。何事もあきらめないことですね。

◎車椅子で旅行に行き、大勢の方にお世話になりました。その感謝を込めお役に立てて下さい。

◎子ども達が目線を夢の高さに上げて生きられる様な世の中であってほしいですネ!!

◎無事に新年が迎えられる御礼に僅かですが。莫大な日本の国家予算そしてＯＤＡの使いみち。いっぱいいっぱい考えなければならないことがあります。電力会社のデータ改竄も。

◎フレーフレー、先生、スタッフの皆様。いつも心の栄養を本当にありがとうございます。ガンバレ会費主人にも協賛させました（二人分です）。一緒に年を取り合って行きましょう。子どもは宝です!!

◎「ストップ鼻血キャンペーン」の一助に。ネーミングが愉快です。まじめな地道な活動に「ユーモア」は欠かせませんね。

◎世の中益々右傾化、憲法九条は決して改めてはなりません。活動が多岐にわたり大変ですが、どうぞお体に気を付けてがんばって下さい。

◎少なくなってしまった友人からのクリスマスカードの中でベラルーシから届いたハガキが輝いていました、命の軽んじられる世の中、小さな命、一つ一つを大切に。

# トルクメニスタン旅行記

山口　ツォモ

カシマーや絨毯を作る女性たち

## 「明るい北朝鮮」へ

「終身大統領が治める独裁国家」「天然ガスで豊かな国」…。そう言われてきたトルクメニスタンを一度自分の目で見てみたいと、昨年末、夫と二人で観光に出かけた。

ところが、昨年十二月二十一日未明、私たちが首都アシガバートの空港に降り立ったまさにそのころ、サパルムラト・ニヤゾフ大統領は急死してしまった。

未明に到着した私たちは、ホテルで朝食を取る前にテレビをつけた。なんだかさびしい音楽が流れ、黒い帽子をかぶった男性がトルクメン語でしゃべっていた。朝食後の仮眠を終えても同じ番組が流れている。何の話かさっぱり分からなかったが、午後の市内ツアーのために迎えに来た通訳と運転手の話を聞いて合点がいった。「大統領が死んでしまった。これからどうなってしまうのか。ショックだ」と通訳の女性は沈んだ表情だった。

「トルクメンバシ（トルクメニスタンの首領、国父、のような意味）」と呼ばれたこの大統領は、ソ連時代、ソ連崩壊後を通して最高指導者だった。野党への迫害や言論弾圧を進める一方、独立後は豊富な天然ガス輸出で入る外貨で急速に国の近代化を進めていた。日本でツアーを組んでくれた、旅行会社スタッフの友人は、「〝明るい北朝鮮〟のような国だ」と言っていた。統制が行き届いているという意味ではまさにその通りだろう。首都の道路にはゴミ一つ落ちていない。また、旧ソ連や私の生まれ育ったモンゴルというのはどこも同じような街並みだが、ここは違った。一晩中、街灯がこうこうと道を照らしているし、大通りに面したビルは豪華で近代的に建て替えられていた。運転手の男性は、「ソ連時代、ガス輸出で入った外貨はみんなモスクワが持っていった。トルクメンバシがその金を国のために使うようになり、ここ十年ほどで街は大きく変わった」と胸を張った。至る所にトルクメンバシやその母親の肖像画、黄金像があった。

トルクメンバシの急死で我々のスケジュールも変更になった。楽しみにしていた展望台に登ろうとすると、「喪に服すため今日から45日間は閉館です」と言って管理人は帰ってしまった。カジノなど娯楽施設はすべて閉鎖になった。人通りも少なくなってしまい、夕飯を食べる予定だった高層レストランは、予約してあったのに予告もなくクローズしてしまった。通訳の女性は「みんな大統領の死にショックを受けているのでしょう。私も仕事がなけれ

大統領の死を報じるテレビ番組

登れなかった展望台

町中にあった大統領の肖像画。黒リボンがかかっている

ば家に戻りたいところです」と打ち明けた。やむなく、夕飯は宿泊していたホテルのレストランで済ませることになった。ビールを注文したらウエートレスが、「大統領が亡くなった日にお酒なんか出していいのかしら」と悩んでいた。

大統領宮殿を除き、町中に溢れる大統領の肖像画に黒いリボンがかけられ始めたのは翌日になってからのこと。人々はかなり混乱していたに違いない。

夜はホテルの部屋でテレビを見たが、面白いことにトルクメニスタンでは衛星放送も含めてさまざまなチャンネルが見られる。ロシア、中東、英語の放送まで。お皿のようなパラボラアンテナ（多くは中国製だという）が民家のベランダから、ニョキニョキといくつも顔を出していた。独裁国家とはいえ、私たちが考える「情報統制」とは少し違うのかもしれない。

## シルクロードの古都

翌朝、アシガバートから三百五十キロ東の古都マリに車で向かった。

トルクメニスタンの面積は日本の一・三倍。人口は約五百万人で、九割ほどがトルクメン人で、ロシア系、ウズベク系もいる。公用語はトルコ語に似たトルクメン語だが、ソ連時代の教育の名残で完璧なロシア語を話す人は多い。トルクメン人はもともと遊牧民族で、東西を結ぶシルクロードの民だ。マリには中央アジア最大の遺跡と言われるメルヴがある。

首都アシガバートから東に向かう門でまず検問。その後も含め計9ヵ所の検問でチェックされた。最初はパスポートまで見たりするので少し不安だったが、いつの間にか慣れた。「検問はいつものこと」ということだが、大統領の死を受けて、特に首都に入る検問は強化されていたようで、反対車線は長蛇の列だった。海外には亡命した反大統領派も多く、大統領が死んだ混乱に紛れて帰国するかもしれないというのだ。ここは国境にも近い。「あの丘の向こうはイランだ」と運転手が指さしていた。

道路はきちんと舗装されており、ほとんど何も無い草原と砂漠が交じった地域を、ひたすらまっすぐ走るのがとても気持ち良かった。運転手は途中で何度か休憩し、お茶やコーヒーを入れてくれたり、道路脇の綿花畑を散策したりしながら旅を続ける。前を走る無蓋トラックの荷台から白いものがたびたび落ちてくるのでなんなのか運転手に聞くと、「綿花だ。輸送中に落ちないようにしないと本当は罰金なんだが」と言っていた。道のわきに走る白い線のようなものは、たくさんのトラックが落としていった綿花だった。綿製品はこの国の特産だ。

小さな青空市場に寄ってくれた。干しメロンを売っていたので我々が驚くと通訳さんが買ってくれた。メロンを薄く切って、板状に重ねて固めたもので、ベタベタするが甘くて美味しかった。ヒトコブラクダや家畜の群を横目に六時間ほど車で走った。モンゴルのラクダはフタコブなので、珍しいものを見た気がした。

お昼過ぎにマリに着き、昼食後、カシマー（フェルトの敷物）、絨毯などを手作りしている家を訪問した。十三、四歳ぐらいの少女から七十歳のおばあさんまでが参加し、色鮮やかなカシマーを作っていた。それぞれに色や柄があり、それを見れば使い道が分かるそうだ。これがモスクで祈る時に、それは結婚式に、あれは人が亡くなった時になどと説明を受けたが微妙な差は、私たちにはすぐには分かりづらかった。前日の午後、アシガバートの絨毯博物館で絨毯について細かく展示説明を受けていたお陰で少し区別がついた。忘れるところだったが、その博物館にはギネスブックに登録されている世界一大きな絨毯があった。サイズは十四メートル×二十一・二メートルで、博物館の建物は、それに合わせて造ったそうだ。

またマリの話に戻るが、カシマーを見せてくれた家にはトルクメンの子ども服があった。その服の裾は結んでおらず、作った時の糸がそのままなので不思議に思って見ていたら、その家の主人が「昔からトルクメンでは子ども服の裾下を縫ったりしないのです。もし縫えば、子どもはもうそれ以上欲しくないという意味になるのです」と教えてくれた。

靴を脱いで、客間に上がる。ペーチ

パラボラアンテナが並んでいる、首都の集合住宅

綿花。後ろには綿花畑が広がっている

フェルト製の敷物・カシマー

幼児服。下部は縫っていないので糸がほつれている

カで暖房され、かなり暖かかった。どの部屋にも絨毯があり、絨毯はトルクメニスタンの伝統文化だとあらためて思った。床に車座になり、我々も一緒になって麺スープをいただいた。薄い塩味で肉の味がしっかりしみ込んだ、臭みのない味だ。歓待してもらって予定以上に時間がかかったため、通訳の女性とメルヴの民族博物館に急いだ。トルクメン族の服、家、昔の日常生活の様子、乳製品作りの道具などいろんな物が展示されていたが、一番印象に残ったのは、結婚式当日に花嫁が乗る、鼻先からしっぽまでと言ってもいいぐらいに飾りつけられたラクダのはく製だった。

メルヴの遺跡では、城壁に無数の穴が空いていた。約八百年前にモンゴル軍に滅ぼされたのだという。当時、ポーランドまでモンゴルが支配したとは知っていたが、こんなところにも遺跡があるとは知らなかった。見渡す限りの草原は冬なので茶色っぽくなっている。遠くには雪に包まれた山並みと、ぽつりぽつりと家畜の群が見える。モンゴルの草原とほとんど変わらず、懐かしいような、不思議な気がする。私の生まれたゴビアルタイのようだ。

ユルタ（中央アジアの遊牧民の住まい）という住まいの形は、丸くて似ているが、モンゴルの「ゲル」は、中央部分でバガナという二つの柱で支えられているのが少し違う。そういえば、民族博物館でユルタについて説明をしてくれたが、草原などで建てるときはモンゴルと同じくドアを南向きに建て、北を背にした場所は年長の男性やその家の主人が座る席、奥さんや女性の席も、モンゴルと同じように東側だ。子どもを寝かす場所、台所の位置なども同じだった。乳製品を造るための牛革でできた袋も似ていた。学芸員さんは説明の途中で突然、展示していた白い石のようなものを差し、「これは何でしょう?」と聞いた。モンゴルのチーズに見えたので「チーズでは」と答えたらとても驚き、「今まで案内したお客さんの中で誰も当たらなかったのよ」と言って喜んでいた。モンゴルとは共通する文化が多いようだ。

古くからオアシス都市が栄えたトルクメニスタンだが、砂漠化が問題になっている。首都郊外には広大な植林地が広がる。通訳の女性は「トルクメンバシの方針で、企業や団体などに割り当てて一年に三百万本の木を植林させている」という。モンゴルでも砂漠化は大問題で、トルクメニスタンも同じようなものだろうと勝手に思っていたが、対策がずいぶん進められているようだ。何年も続いているのだから、結構大きな木も多い。春になればトルクメニスタンの方が緑豊かだろう。植林後の世話もきちんとやっているようで、自然の森のように見えるところもあった。



## 市場や人々

メルヴ遺跡を見た帰り、市場に寄った。夫が「トルクメン人の帽子は、旧ソ連で一番大きいらしい。それを買おう」と旅行前から言っていたのでそれを買いたかった。

帽子はすぐに見つかった。羊の毛皮で作られた、黒、白の大きな帽子二つを買った。ここでは帽子の大きさが人々からの敬意の度合いを表すという。帽子が大きければ大きいほど、尊敬されている男性ということなのだそうだ。夫は若いし、中ぐらいの大きさの帽子にした。二つで五十万マナト（一円＝約二百マナト）。

大きな市場で、肉、野菜や果物、衣類など何でもあったが、値札はどこにもない。値段は双方で言い合い、折り合った額で買うようだ。買い物した後に、双方が納得して商売したことの証なのか、お客と店員がお互いの手にお金をはさんで握手するのが習慣だった。写真をたくさん撮ったが、市場で働いている人も、買い物に来ている人たちも、目が合うと笑顔を浮かべ、とても感じが良かった。

## トルクメンバシの葬儀

首都に戻って、二十四日はトルクメンバシの葬儀の日だった。通訳の女性に、「昼まで、葬儀のために市中心部には車が入れない。午後迎えに行くからホテルで休んでいて」と言われたが、夫と大統領宮殿まで葬儀の様子を見に出かけることにした。ホテルは中心部にあり、大統領宮殿はわずか数ブロック先だ。

メルヴの遺跡。中央が筆者

植林が広がる山の裾野

大きな帽子のおじいさん

市場で買い物をして“握手”

部屋から出て、一階までエレベーターで降りようとしたが、動かない。故障だと思って従業員用のエレベーターに乗って一階に着くと、ロビーには体の大きな黒人SPたちが立っていて物々しい雰囲気だった。弔問の外交団が多かったので、エレベーターは彼ら専用で使っていたのだろう。まずは、とフロント前で写真を撮っていると、「誰だ?」とフロントの女性に尋ねる声。女性は「観光客よ」と答えていた。

書き忘れたが、この国では勝手に通りで写真を撮ってはならない。大統領宮殿は撮影禁止だし、それ以外のものを撮影しても、いつ何時、トラブルになるかしれない。通訳の女性からは「一緒にいるとき以外、外では写真を撮らないように」と言われていた。

外に出ると急に緊張してきた。大通りには、大統領宮殿に弔問に向かう人の流れができていた。流れに混じって、われわれも向かった。不思議なことに気づいた。警官以外に、黒いハンチングなどをかぶった男性が三、四人、数メートルおきに立って群衆を見つめている。弔問ルート以外の方向に曲がろうとしたり、逆方向に進もうとするとその男たちが注意している。鋭い目付きで、私服警官のようだ。

大統領宮殿と国会議事堂前の広場まで来たが、人がいっぱいでどんな行事が行われているのか分からない。カメラを隠しながら何枚か写真を撮ってしまった。宮殿に弔問に訪れた人たちは、帰りに宮殿から花を持って帰ってきていた。私たちからすれば花は捧げるものと思っていたので少し驚いた。こういう習慣があるのだろうか?若い女性やおばあさんなど、涙をふいている人もけっこういた。

帰り道で迷い、何度か警官に聞いたが笑顔で丁寧に教えてくれた。ビデオを撮っていたら見つかってしまい、「この地区では撮ってはいけない」と走ってきた警官に注意されたが、「今撮った分は後で消しなさい」というだけで、しかも非常に丁寧な言葉遣いだった。

トルクメンバシがいなくなってこの国はどうなるのだろうか。トルクメンバシは「ルフナマ」という倫理の本を書いて国民みんなに読ませた。「聖なるトルクメニスタン、私の母国、(中略)、母国を偉大なるトルクメンバシを裏切ったら命がなくなるがいい!」との宣誓で始まる「ルフナマ」は国民にとっては「コーラン」に並ぶ書(トルクメン人の多くはイスラム教徒)であり、さらに日本語を含めて六十カ国語にも翻訳されている。彼が造った何千人も入れるモスクも、葬られる廟もみな金ぴかで壮観だ。トルクメンバシの存在感を強くアピールするものばかりだが、次の大統領はどうするだろうか。

共産主義時代の遺物として、レーニン像が一つだけアシガバートに残されていた。色鮮やかなモザイク造りの台座には「レーニン主義こそ、東方の人民を解放する道だ」とロシア語で書かれていたが、若い通訳の女性は、「よけいなお世話よ」と笑っていた。

日が暮れ始めた。レーニン像の近くには近代的な高いビルがそびえる。ゴミ一つない街は綺麗にライトアップされ、まるで花火が上がっているようだ。自分たちが中央アジアにいるとはとても思えない。「ラスベガス」のようだ。豊富な資源と独裁政治のせいで、とにもかくにも、イランとアフガニスタンに隣接するこの国は、中央アジアで一番と言っていいほど安定していた。公共料金は無料、ガソリンは一リットル約四円。町には中古の日本車があふれ、建設ラッシュで活気もあった。人々が優しかったのは、多くの人が、生活に余裕があるせいかもしれない。いつかもう一度トルクメニスタンに行きたい。その時にも、人々にはこの笑顔のままでいてほしいと強く思っている。

近代的なビルの一つ、「出版省」の建物

大統領が眠る廟

町中で見かけた子どもたち

トルクメニスタンの装飾品。銀と赤い石が特徴

**やまぐち・つぉも**
主婦　ゴビアルタイ(モンゴル南西部)出身、長野市在住。

会員さんを訪ねて

フストレーチャ：出会い

# ВСТРЕЧА

## 樹一風になって・・・

『千の風になって』が脚光を浴びる10年も前に、人間の都合で切り倒されてしまった大好きな老槐（えんじゅ）の樹へのレクイエムと、老槐からの平和のメッセージを込め、〈老槐の樹は「風」になった〉と詩った方がいます。

『樹木戸籍・松本の樹たち』（発行：露滴山房）という本の著者、池田久子さんは松本在住の童話作家で、ＪＣＦの創立当初から、会員として応援して下さっています。

春の気配の濃くなった3月のある日、松本郊外の池田さんのお宅を訪問しました。

たくさんの木々が所狭しと植えられたお庭に面した部屋は、暖かい日差しの中に様々な鉢植えがいっぱいで、さながら温室、天窓には古い民家から譲り受けたという障子がはめ込まれ柔らかな影を作っています。何だか童話の世界の中に迷い込んだみたい、さぁ池田さんのお話しがはじまりました。

池田さんは長野県の南、飯田市のお生まれで、御連れ合いの仕事の関係で木曽、塩尻、そして松本に移り住まれました。池田さんは戦争への暗い時代に入る昭和5年生まれ、軍国教科書として悪名高い「さくら教科書」育ちだと言います。

夫は私より10年、宮沢賢治の作品を通じた友人は5年私より早く生まれたために教科書も「はなはとまめ」教科書で、詩や文章、俳句を大切にする、とてもリベラルな教師から教育を受け、私とは全く違う青春を送っています。子どもが最初に出会う教科書や教育の恐ろしさを私は身を持って体験したのですよ。

その頃、東京都でも図書室のある学校は3校だけだったのに、白樺教育などに影響された先生がまだいっぱいいた長野県では、田舎の学校にも図書室がありました。ろくな本は無かったけれども、講談社のきんきら絵本（彩色してあるきれいな細密画絵本）の「孝女白菊」「ああ無情」をばっちらがい（奪い合い）で読んだものです。その他にはお固い「信濃教育会」の雑誌などが並ぶだけの書棚に、ある日突然〈彗星のように青い光芒をはなって天空をよぎり〉現れたのが、宮沢賢治の『風の又三郎』だったのです。当時の児童文学、子どものお話はたいてい「めでたし、めでたし～」で終わる教育臭のあるお話しだったのに、私たちとおんなじような子どもが活き活きと写し出されてていて、行間から子どもたちの遊ぶ様子とか、野原の光っているお日様の光とか、風の匂い、小川のせせらぎを感じてワクワクするような物語との出会いは、それが初めてだったのです。私はすっかりそれに魅せられてしまいました。

その中でも、一番影響を受けた作品は『祭りの晩』というお話しです。

祭りの晩に山男を助けた亮二に、山男が約束通りに届けものをしてくれたので、亮二はなんだか、山男がかあいそうで泣きたいようなへんな気もちになりました。

「おじいさん、山男はあんまり正直でかあいそうだ。僕何かいいものをやりたいな」

「うん、今度夜具を一枚持って行ってやろう。山男は夜具を綿入の代りに着るかも知れない。それから団子も持って行こう」

亮二は叫びました。

「着物と団子だけじゃつまらない。もっともっといいものをやりたいな。山男が嬉（うれ）しがって泣いてぐるぐるはねまわって、それからだが天に飛んでしまうくらいいいものをやりたいなあ」

私はこの作品が好きで何度も読み、私だったら何を持っていってあげよう、

鉢植えの花々に囲まれて、お話される池田久子さん

何がいいだろう、何がいいだろうかといつも考えていました。そして私が結婚してから「あっ、これはお嫁さんがいい」と思い、創作民話を書くようになってから、山男に女房が来る話を書いたのです。

そうか、お嫁さんをもらったら、嬉しくて泣いてぐるぐるはねまわって、それからからだが天に飛んでしまうのか…ふと考え込む布山です。

戦後を問う会・松本で自作民話の紙芝居

もしあの時、宮沢賢治の作品に出会わなかったら、今こうして児童文学に関わらなかった。小さい時にいい本に出会うことは大事なことですね。

賢治の素晴らしい作品に出会ったのに、すっかり軍国少女になってしまった私は、4人も肉親を無くして自分自身も学徒動員で結核にかかってひどい目にあったのに、敗戦の時に全然嬉しくなかったのです。「こんなことで戦争が終わってしまったら、私の父母や兄や祖母や、死んでしまった人は、全く犬死になってしまう、こんなとこで戦争が終わってしまっては困る！」と泣きました。

以前から短歌を書き、詩を書いたりしていましたが、短歌だけでは言い表せないものがでてきて児童文学を書くようになりました。何となく児童文学にあこがれる気持ちはあったのですが、賢治に出会わなかったら、そういう気持は続かなかったと思います。

日本の児童文学者はほとんどが戦争に協力して、若者を戦争にかりたてる物語を書きました。戦後、児童文学者協会は大反省して、これからは絶対にこういう作品は書かないと宣言して発足します。でも朝鮮戦争が始まると、ナチスの記章なんかをおまけにつける雑誌がでて、戦後発刊した志ある雑誌はほとんどつぶれてしまうのです。ほんとにもろいものですね。

山繭の童話を書くために松本の中山や里山辺に取材に行って、戦争中強制連行された中国人や朝鮮人がどのような扱いを受けていたかを知りました。朝鮮人は1944年6月から敗戦まで、中国人は1945年7月から敗戦



まで、支給されたわずかの軍手や地下足袋も日本の監督等に隠匿され、素手、裸足で軍の地下工場、半地下工場建設のため働かされたのです。食べ物も無かったので、あのあたりは道ばたの雑草がすべて無くなったそうです。戦争が終わっても朝鮮人には知らされず、その年の秋の台風の時に住んでいた小屋が倒れてぞろぞろ出てきたそうです。敗戦と同時に強制連行のすべての資料が焼かれ、松本に連行された朝鮮人およそ7千人のうち、何人亡くなったかも全くわからない。朝鮮半島から連れてこられた人達の問題を解決しなければ、日本の拉致問題の真の解決はないと思う。

強制連行の問題に関わるようになって加害のことについて考えるようになりました。戦争の頃のことは「被害」のことだって話すのも書くのもつらい。でも戦争体験だって時間が経つと想い出になり、美化して話す人もいます。…今の若い者は徴兵が無いから、だらしないとか、スイトンだって健康食だったとか…。

でも加害体験を語ることはとても辛いし、勇気もいるのです、そして加害を語ることで、他人の痛みを想像できるようになります。他人の痛みのわかる人間にならないと、再び侵略を繰り返すと思うのです。

池田さんの著書に、松本の地名のゆかりを訪ねた『松本の地名考　わたしの街角』と、その街角の木々の物語を訪ねた『樹木戸籍・松本の樹たち　絵本・わたしの「樹」』があります。

日本は便利だけを求めて木をばさばさ切ってしまって、松本の町から木がなくなっています。

ある日、いつも道の行き来に見ていた、信州大学のそばの百年のエンジュがばっさり切られていたのです。びっくりしてかけつけた時は為す術も無く、近所の酒屋さんからお酒を買って来て、残された切り株に振りかけてお別れをしました。片腕くらいの切り株を形見にもらって来たのですが、残念でたまらなくて、松本のタウン紙にエンジュへのレクイエムを書いたのがきっかけで、松本の樹たちへの行脚が始まりました。

樹木戸籍・松本の樹たち　絵本・わたしの「樹」

エンジュが切られた時、そのそばの土手の内側のサイカチとピラカンサとカラタチも切られて、そのかわりコノテガシワ（センジュ）が植えられました。個性豊かな実を付けるサイカチ、ピラカンサ、カラタチがコノテガシワ一辺倒になってしまうなんて、無粋だなぁと思ったものです。

でも戦争中このあたりは松本歩兵50連隊があり、別名「レンタイ通り」と呼ばれていました。３１５１名の50連隊最後の将兵は、敗戦前年にテニアン島で全滅し、白木の箱に納められ無言の帰還をしたのです。コノテガシワは「児の手柏」の語源からもわかるように、小枝が小さな手を合わせる形の樹です。だからこれは千手観音が手を合わせている、と思うことにしたのです。そして二度と「レンタイ通り」を作らぬことこそ、樹へのレクイエムだと思うのです。

その後、松本市街地整備事業で国府町のエノキとサイカチも切られてしまうと聞いて、対策本部の事務所を訪ね、あの木はご神木だから是非残して欲しいとお願いしたら、木々を残した公園になりました。若い木が植えられても、古木が残ったために奥行きが出て、古い木は貫禄があるので、他の木もとてもいい感じになっています。諦めずに言ってみるもんですね、働きかければ木の命が守られることもあるんです。

みずきは天に向かって真っ白に花が咲く樹です。私はこれを「空への献花」と呼んでいます。以前家に二本あって成長が早いので、一本を切ったら、切り株から血のような赤い樹液が溢れ出て、驚かされました。春先には灰色の樹幹に聴診器を当てて、吸い上げる水音、樹の鼓動を聞くんですよ。木は力をくれます。

池田さんの指さす柱には、信州大学学長の小宮山医師から頂いたという、由緒正しい聴診器が、掛けられていました。

池田さんのお話しを聞いていると、今まで私の前に漫然とあった街路樹や道ばたの木々が、「国府町の榎」「中央公園のイヌエンジュ」「天白町の木下尚江平和アンズ」「あがたの森公園のニレの樹」「風の又三郎がどっどど、どどうど、どどうどどうう、と去来したサイカチの樹」ときちんと名前を持って、大地にすっくと立ち上がってきます。私も松本の木々をもっと知りたいと思いました、そして今までにまして木々が優しく頼もしく見えてきました。

戦後を問う会・松本で、九条屏風を使ってのお話



尽きないお話しの最後に、これからの池田さんの夢や取り組みをお聞きしました。

かつて妹が幼子を残して、がんのために28歳で亡くなった時、私はショックから一年ほど何も手につかず、鬱々として、生きる力を無くしてしまいました。その時、偶然、もろさわようこさん（１９２５年生まれ。著書に『信濃の女』など）の、

『戦争で周りの人が死んで、本当は私も死ぬところを生かしてもらっているのだから、亡くなった人達のために、平和のために生きなければならない』

という文章を読み、

「私と同じだ、戦争で肉親を無くして結核で死ぬところを、こうして生かしてもらっているのだから、平和のために生きなければいけない！」

と、そこで目が覚め、生きる力が出てきました。

最近、久しぶりに新聞でもろさわようこさんの文章を読み、改めて、私もどんなにちっぽけでもこれからも平和のために働かなければ、と考えています。

お暇時のお土産に、池田さんはお庭のサンシュユの花の枝を切って下さいました。枝からはじけるように咲くサンシュユの黄色の小さな花は、春のスイッチだとか…。

**花のスイッチ**

**ぱちぱちと夜明けの風の中でサンシュユが点る**
**森のニングル（小人）がやって来て**
**背伸びしながらスイッチのひもを**
**引っぱったから…**（松本の樹たちより）

池田さんのスイッチは事務局にも春を運びました。

池田さん、素敵な時間をありがとうございました。

（事務局・布山）

## 臨界事故隠蔽（いんぺい）と地震

# 東電の原発を止めて、生活の検証を！

神谷さだ子

3月25日、石川県能登を震源地に震度6強の大地震が発生した。輪島・七尾市など家屋の損壊、土砂崩れが起こり、人々は緊急避難し、不自由な生活を強いられている。地震列島日本を震撼させる天災が起こってしまった。震源地に近い志賀原発は、原子炉を緊急停止する226ガルを記録したが、折りしも1、2号機は停止中で放射能もれなどの問題はなかったと報じている。

1999年、北陸電力の志賀原発1号機で臨界事故が起きていたことが明らかになったばかりだ。北陸電力の事故隠蔽に端を発し、次から次へと沸騰水型原子炉の制御棒が抜けるトラブルが起きていたことが明らかになった。

79年、米国のスリーマイル島の事故、86年チェルノブイリ事故を経るごとに「日本の原発は、安全です」といい続けた電力会社の虚偽が、明らかになったわけだ。

過去にこのような事故が起きているにもかかわらず、隠蔽されたことが、トラブルの連鎖になったと言えよう。「報告義務が法制化されていないから」では、私たちは納得できない。放射性物質を扱うことを軽んじている。実際、放射能漏れはなかったというが、作業者は被曝しなかったのだろうか。どのようなトラブルでも、情報開示してほしい。お菓子や湯沸かし器のトラブルは、不買で私たちの意思を示すことができる。しかし、電力は無くてはならない公共財である。区別して消費することができない。国は、今回の処分として、特に東京電力の原発発電量分を停止させる措置を取ったらどうだろうか。つまり、東電の原発を止めてほしい。そこで、どれだけ市民生活に影響が出るか、皆で検証したい。今回の事故隠蔽は、それほどに大きな問題をはらんでいる。

地震のニュースに、被災地の方々の安否と不安な生活の大変さを思う。原発事故は、人災なのだ。

### 原子力発電所の隠蔽されていた事故

| 電力会社 | 年月 | 事故内容 |
|---|---|---|
| 北陸電力 | 1999年6月 | 志賀原発1号機：臨界事故 |
| 中部電力 | 1991年 | 浜岡原発3号機：制御棒抜ける |
| 東北電力 | 1988年 | 女川原発1号機：制御棒抜ける |
| | 2003年3月 | 女川原発3号機：制御棒誤作動 |
| 東京電力 | 1978年11月 | 福島第一原発3号機：臨界事故7時間半 |
| | 1993年 | 福島第二原発3号機：制御棒抜ける |
| | 2000年 | 柏崎刈羽原発1号機：制御棒抜ける |
| | 2005年 | 柏崎刈羽原発3号機：制御棒誤作動・報告 |
| | 2005年 | 福島第一原発2号機：制御棒誤作動・報告 |

### 関連ウェブサイト

- 原子力資料情報室（CNIC）
  http://cnic.jp/
- 北陸電力
  http://www.rikuden.co.jp/
- 東京電力
  http://www.tepco.co.jp/
- 原子力安全委員会
  http://www.nsc.go.jp/
- 原子力委員会
  http://aec.jst.go.jp/
- 気象庁
  http://www.jma.go.jp/jma/index.html

# 原発の臨界事故隠蔽（いんぺい）問題 関連記事

**●志賀原発、臨界事故報告せず**

北陸電力は、志賀原発1号機で99年6月、停止中の原子炉が突然、臨界状態になる事故が起きた上、緊急停止装置が15分間作動しなかったにもかかわらず、国に報告せず隠ぺいしていたと発表した。原子炉は手動で停止され、外部への放射能漏れはなかった。（3月15日　毎日新聞）

**●経産相、北陸電力を厳しく非難**

志賀原発1号機の臨界事故について甘利経済産業相は「明確な事故隠しだ。これまでの一連のデータ改ざんとは質が違う。厳正に対処しなければならない」と厳しい姿勢で処分を検討する方針を示した。（3月15日　毎日新聞）

**●志賀原発1号機の停止と総点検を指示**

経済産業省原子力安全・保安院は、北陸電力の永原功社長を呼び、志賀原発1号機の停止と安全総点検を指示した。（3月16日　毎日新聞）

**●経産省、保安検査を強化**

経済産業省原子力安全・保安院は、志賀原発の保安検査強化を決めた。職員を同原発に派遣し、発電所内の不正防止体制や、事故や故障などに対する品質改善体制、安全重視意識のあり方などを調べる。臨界事故隠しの詳しい事実関係も確認する。（3月16日　毎日新聞）

**●県と町が立ち入り調査**

石川県と志賀町は、原子炉停止の確認などのため志賀原発を立ち入り調査した。（3月16日　毎日新聞）

**●浜岡、女川でも制御棒抜け**

中部電力浜岡原発3号機と、東北電力女川原発1号機でそれぞれ1991年と88年、定期検査中に制御棒が想定外に抜けるトラブルがあったことが分かった。いずれも核反応は起きず、緊急停止もしなかったため、国への報告対象ではなかったという。（3月19日　時事通信）

**●臨界事故隠し、原子力委が批判**

志賀原発1号機の臨界事故隠し問題を受け、政府の原子力委員会は臨時会議を開き、「国民の信頼を揺るがすもの」などと批判し、安全最優先の思想や国民への説明責任を果たすよう電力各社に求める見解をまとめた。国に対しても、「現在の安全確保のためのシステムが国民にとって信頼するに足るものとなっていることを適切に確認することが重要」と注文をつけた。（3月19日　毎日新聞）

**●志賀原発の特別検査開始**

志賀原発1号機で起きた臨界事故隠し問題で、経済産業省原子力安全・保安院は、同原発に対する特別保安検査を開始した。（3月19日　時事通信）

**●三原発とも同種ミス**

浜岡原発3号機と女川原発1号機でそれぞれ1991年と88年、定期検査中に原子炉の出力を調整する制御棒が抜けたのは、いずれも制御棒を動かす装置の弁の開閉にかかわるミスが原因だったことが分かった。99年に起きた志賀1号機の臨界事故も、きっかけとなった制御棒の脱落は同種のミスだったことが分かっている。（3月19日　時事通信）

**●女川3号機でも制御棒誤作動**

東北電力は、女川原発3号機で2003年3月、定期検査中に制御棒が誤作動し、5本が押し上げられたと発表した。当時、核燃料は外されていたため、原子炉の緊急停止などは起こらなかった。（3月19日　時事通信）

**●原子力安全委、厳しく批判**

志賀原発1号機の臨界事故隠しで、政府の原子力安全委員会は、「安全確保の基本から逸脱するもので、誠に遺憾」と、北陸電力の姿勢を厳しく批判する見解を発表した。（3月19日　毎日新聞）

**●原子力白書、異例の公表**

政府の原子力委員会は、06年版の原子力白書を公表した。志賀原発の臨界事故隠しなどを受け、「（電力会社は）安全を最優先し法令を順守することが必要」との見解を、白書に添えて配布する異例の公表ぶりになった。国に対しても、原発の安全確保のシステムが信頼できるものかどうか確認するよう求めている。（3月20日　毎日新聞）

**●東電二原発でも制御棒抜け**

東京電力福島第二原発3号機と柏崎刈羽原発1号機で、それぞれ定期検査中の1993年と2000年、原子炉の出力を調整する制御棒が抜けていたことが分かった。いずれも臨界には達せず、国への報告対象外だった。同社は、いずれのケースでも、発電所内で再発防止策を検討していたが、全社的な情報共有はされなかった。（3月20日　時事通信）

**●東電、ほかに制御棒誤作動2回**

原発の制御棒抜けが明らかになった東京電力では、05年にも柏崎刈羽原発3号機と福島第一原発2号機で、定期検査中に制御棒が押し上げられる誤作動があった。発生直後に同社は不適合事象として公表している。（3月20日　時事通信）

**●福島第一原発で78年に「臨界事故」**

東京電力福島第一原発3号機で1978年11月、定期検査中に制御棒が5本脱落していたことが分かった。同社は「現状の判断では、臨界というレベルに達していた」と認めた。臨界は最大7時間半続いたとみられ、99年の志賀原発1号機の事故よりはるかに早い、「日本初」の臨界事故だった可能性が高い。（3月22日　時事通信）

**●原発市町村会が徹底調査を要求**

志賀原発1号機の臨界事故隠しを受けて、全国原子力発電所所在市町村協議会長の河瀬・敦賀市長が、経済産業省に対し、事故の原因や隠ぺいの経緯の徹底調査と公表を求める申し入れを行った。（3月22日　毎日新聞）

**●事故隠し会議に役員も出席**

志賀原発1号機の臨界事故隠しで、隠ぺいを決めた同原発幹部らの会議に、北陸電力の現在の役員の一人が出席していたことが分かった。事故隠しが発覚した今月15日の北陸電の説明では「当時の発電所長の判断。本社や取締役クラスは知らなかった」と、隠ぺいの関与を否定していた。（3月22日　毎日新聞）

**●原子炉の制御棒抜け、報告対象に**

経済産業省原子力安全・保安院は、原子炉等規制法の省令を近く改正し、定期点検中の操作ミスなどで想定外に制御棒が1本以上抜けるトラブルが発生した場合、国への報告対象に加えることを決めた。（3月23日　時事通信）

**●隠ぺい会議に安全監督者も参加**

志賀原発1号機の臨界事故隠しで、当時、同原発の安全管理を監督していた「原子炉主任技術者」の次長が、事故直後の隠ぺい会議に参加していたことが分かった。（3月24日　毎日新聞）

**●石川県能登で震度6強の地震**

25日午前9時42分ごろ、石川県を中心に地震があり、同県の輪島、七尾両市と穴水町で震度6強を観測した。気象庁によると、震源地は輪島市南西沖の約30キロ、震源の深さは約11キロ、地震の規模（マグニチュード）は6.9と推定される。北陸電力によると、志賀原発1、2号機は運転停止中のため、放射能漏れなどの異常は確認されていない。（3月25日　毎日新聞）

**●地震加速度、緊急停止値上回る**

北陸地方を中心とした25日の地震で、震源地に近い志賀原発では、原子炉を緊急停止させる基準値を上回る226ガルの加速度を記録した。全2基が停止中で、大きな影響はなかった。柏崎刈羽原発は加速度が緊急停止値を下回り、通常運転を継続した。（3月25日　時事通信）

**●地震で放射能帯びた水飛散**

北陸電力は、運転停止中の志賀原発1号機の原子炉建屋にある使用済み燃料プールから、放射能を帯びた水約45リットルが屋内に飛び散ったと発表した。地震の揺れによるものとみられる。外部環境への影響はないという。（3月25日　時事通信）

# 「ＨＥＩＷＡの鐘」の歌声がベラルーシの地に届くまで

三輪千子（松本市立筑摩小学校６年１組担任）

ベラルーシ・イラクの子どもたちが描いた絵を前に、６年１組の子どもたちとこの曲を歌いながら感じていた。私たちが求めているのはこれではないか、今歌っている子どもたちのこの思い、遠くの国であってもお互いの幸せを願うこの純粋な気持ちではないかと。

『…ぼくらの生まれたこの地球に／奇跡を起こしてみないか／拳をひろげてつなぎゆく／心はひとつになれるさ／平和の鐘は／君の胸に響くよ／…脅かすことでしか守ることができないと／くり返す戦争／忘れゆく／愚かな権力よ／…いつか／自由な空が／虹かかる／…未来の夢を／ここに残してゆこう／…（仲里幸広 作詞）』

３月、６年１組の子どもたちの思いをのせた歌声と手作りのミサンガや絵などが、第87次訪問団のみなさんの協力でベラルーシへ届けられた。「ベラルーシの人たちが本当に欲しいのはお金や物じゃない」「言葉は違っても、気持ちをこめて歌えば思いは伝わると思う」と録音されたＨＥＩＷＡという言葉をくり返すその歌は、そうして海を越えた。

今回の活動は、海外の人とも交流したいという６人の子どもたちの提案から始まった。

６年１組では総合の学習で、地域の老人や保育園児との交流を続けてきていた。「お互いにとってより良い交流にしよう」という目

松本市立筑摩小学校６年１組の皆さん





標のもと、彼らが交流相手の窓口として選んだのはＪＣＦ。「相手にも喜んでもらえるような活動にしたいから、海外協力活動をしている団体を探したら、これ（ＪＣＦ）、松本にあるんだよ、だから」とグランド・ゼロを手にしていた。夏が終わろうとしている頃であった。

今までの様々な学習の中で、世界には恵まれない子どもたちがいることを１組の子どもたちは知っていた。食糧問題や民族紛争・戦争によって自分たちと同じようには学べなかったり遊べなかったりする子どもたちがいることに、１組の子どもたちはいつも心を痛めていた。なんとかしたい、なんとかならないのか、大人たちは平気なのかと、彼らはいつも考えてきていた。交流相手は違っても、みんなが優しい気持ちで仲良く暮らせるようにという願いは、１組の交流活動のテーマになっていたのではなかろうかと思う。

学習が進んできた10月の終わり、海外グループの６人は神谷さんから直接学ぶことを考える。そして11月、６人は神谷さんに出会い、12月にはみんなで話を聞く。神谷さんの話は感動でもありショックでもあったと子どもたちの多くが学習ノートに書いている。他教科で原爆ドームの学習をしていたので、核や原子力について多少の知識は持っていた。しかし、彼らにとって戦争や原爆での被害は、とても遠い「過去」であった。それが、実は「過去」ではなくて「今なのだ」という事実にショックを受けたのだ。ナージャの村は本当に何度見ても美しい。そしてそこに生きる人々の太陽のような笑顔。悲惨な事故による悲しい現実とは裏腹なそのあまりの明るさとそれを支える神谷さんたちの姿に、子どもたちには今まで感じたことのない感情がわいていた。「（汚染がひどくて）悲しいけど、（それでもその地にいてくれて）なぜか嬉しい。誰もいなくなったら本当に悲しい」「きれいだからよけいに悲しい」「こんなにきれいなところにいて、私だったら何もいらない。返してって言いたい」「黙っていたら知らないで終わっちゃうから伝えていきたい」

ベラルーシに届けられた歌声や絵には、子どもたち一人一人のそんな気持ちが込められている。そして、松商学園放送部ＯＢのみなさんのように、将来もしかしたら自分たちにも何かができるのではないか、という密かな思いも胸に抱いて…。スパシーバ！

# こんにちは！

# Здравствуйте!

## 筑摩小学校6年1組の皆さんの感想文より

院内学級の子ども達の絵画展で歌う筑摩小の児童

私ははじめ、鼻血が出ている男の子の絵を見て、「どうして鼻血が出ている絵なんて描いたんだろう？」と思っていたけれど、神谷さんの話を聞くと、そんな気持ちはなくなって「白血病って、少しけがをしたり鼻血が出たりするだけでも死んじゃったりするんだ…」と悲しくなりました。イラクの子どもの絵の中で、自分の故郷の二つの絵があって、一つめは楽しそうで色鮮やかだったけど、二つめは暗い戦争の絵だったのでこの二つめの絵を描いた時、その子はきっとつらかったと思うと私も悲しくてつらかったです。一つめの絵のようなふるさとに戻ってほしいです。『HEIWA の鐘』を歌っているとき、「戦車なくなって」と考えてました。明るい元気な歌を送って元気になってほしい。

『HEIWA の鐘』の歌詞を持参

エコセンター臨床心理士さんに、生徒さんからのお手紙をロシア語に訳して手渡しました

僕が思ったことはベッドに寝たきりのままなのに絵を描いたりできるので、びっくりしました。

病気で学校へ行くことができなくても絵を描くことができ、いろいろな絵がありました。つらい思いをしているのに、明るい絵を描いたりしていました。最後に『HEIWA の鐘』を歌いながらイラクの病気の子ども達にこの歌を届けたいなと思いました。この歌を聴けば元気が出てきそうな気がしました。言葉はわからなくても、気持ちをこめて歌えば、僕たちが思っていることがベラルーシやイラクにいる子に伝わると思っています。僕たちが歌った歌をＣＤに入れて送れば、この歌を聴いて元気を出して、勇気も出ると思います。歌う歌、一つ一つに気持ちを込めて歌えば、生きる希望ができると思います。

色紙で折ったコマに大喜び

## チェルノブイリの森
### メアリー・マイシオ

**Book**

チェルノブイリの森
事故後 20 年の自然誌
著者：メアリー・マイシオ
訳者：中尾ゆかり
装幀・装画：川村易
発行：日本放送出版協会
定価：2200 円＋税

爆発事故から20年経ったチェルノブイリ原発の周辺地域には、希少種の動物が棲息する森が出現していた。しかし、いまなお土壌や水系は汚染されている。ウクライナ、ベラルーシの立ち入り制限区域に棲息する動植物を紹介し、放射性核種がいかに巧みに食物連鎖に忍び込んでいくかを詳細に報告。

## むだで危険な再処理
### 西尾漠

**Book**

むだで危険な再処理
著者：西尾漠
発行：緑風出版
定価：1500 円＋税

現在試運転中の青森県六ヶ所村の「使用済み核燃料再処理工場」が、今年夏に本格稼働されようとしている。高速増殖炉の開発も、プルサーマル計画も頓挫しているのに、核廃棄物が逆に増大し、事故や核拡散の危険性の大きい「再処理」をなぜ強行しようとするのか。本書はムダで危険な再処理問題をQ＆Aでやさしく解説。

## 爆心
### 青来有一

**Book**

爆心
著者：青来有一
写真：西山嘉樹
装丁：番　洋樹
発行：文藝春秋
定価：1762 円＋税

「私がだれでありどこからきたのか、六十年以上の時が流れて私にはもう調べるすべもない。わかっているのは私は昭和二十年八月九日十一時二分の白い光の中から現われたことだけである。私の戸籍上の誕生日はその日になっている。」（『島』より）。長崎の爆心地周辺で生きる人々の原体験とその後の日常を描く短篇連作集。『釘』『石』『虫』『蜜』『貝』『島』の六篇を所収。



## パラダイス・ナウ
### 監督・脚本：ハニ・アブ・アサド

**Movie**

パラダイス・ナウ
監督・脚本：ハニ・アブ・アサド
2005 年／仏・独・蘭・パレスチナ
90 分／ 35mm ／カラー／シネスコ
配給：アップリンク
http://www.uplink.co.jp/paradisenow/
上映：東京都写真美術館ホール、ほか

イスラエル占領地、ヨルダン川西岸地区の町ナブルス―貧困で人々は苦しみ、時折ロケット弾が飛んで来る。パレスチナ人の幼馴染みのサイードとハーレド、二人の若者が自爆攻撃に向かう48時間の葛藤と友情を描いた物語。

## 日本に恋するロシア映画
### 杉浦かおり

**Book**

ユーラシアブックレット No.101
日本に恋するロシア映画
著者：杉浦かおり
発行：東洋書店
定価：600 円＋税

昨年、日本でも公開され大きな話題を呼んだ『太陽』のソクーロフ監督をはじめ、エイゼンシュテイン、タルコフスキー、ズビャギンツェフ、ロゴシュキンなど、日本の映画と文化への関心を盛り込む映像作家たちとその作品を紹介。

## ベラルーシの室内楽作品集
### ミンスク弦楽四重奏団

**CD**

Minsk Music
　ベラルーシの室内楽作品集
演奏：ミンスク弦楽四重奏団
　ブルーノ・マイアー（フルート）
　ハン・ヨンケルス（ギター）
定価：2700 円＋税
（輸入盤・日本語解説付）
輸入販売元：マーキュリー
http://www.mercury-coo.com/

ベラルーシの現代作曲家５人による２０００～04年に作曲された6曲の室内楽作品を収録したアルバム。ミンスク弦楽四重奏団は、ベラルーシ国立音楽大学出身の若手４人によって２０００年に結成された気鋭のカルテット。ベラルーシの郷愁と空気を感じさせられるアルバム。

CD

## Preludes and Dreams
### レーラ・アウエルバッハ

Preludes and Dreams
演奏：レーラ・アウエルバッハ
（作曲・ピアノ）
定価：2500 円（輸入盤）
販売：新世界レコード社

レーラ・アウエルバッハは１９７３年、ロシア・チェリャービンスク生まれ。作曲家兼ピアニストで、詩人、小説家としても活動している。現在は米・ニューヨーク在住。このアルバムは「ピアノのための24の前奏曲」「夢十篇」「コラール、フーガおよび前奏曲」を収録した自作自演のピアノ曲集。

CD

## ３ЕМФИРА.LIVE
### ゼンフィーラ

３ЕМФИРА.LIVE
（ゼンフィーラ・ライヴ）
ゼンフィーラ
定価：2500 円（輸入盤）
販売：新世界レコード社
http://www.shinsekai-trading.com/

ロシアでカリスマ的人気を誇るロックグループ、３ｅｍфｉｒａ（ゼンフィーラ）の最新ライヴ・アルバム（２００６年）。「ゼンフィーラ」は、ボーカルのラマザーノバ・ゼンフィーラ・タルガートブナを中心として１９９８年に結成された４人組のロックバンド。

CD

## アマン・イマン～水こそ命
### ティナリウェン

アマン・イマン～水こそ命
ティナリウェン
定価：2500 円＋税
発売：ライス・レコード
販売：オフィス・サンビーニャ
http://www.sambinha.com/

「ティナリウェン」はマリ北東部出身のサハラ（砂漠）の民、トゥアレグ人のグループ。ボブ・マーリーやボブ・ディランから影響を受け、トゥアレグの伝統を加味した独特の〈砂漠のブルース〉をつくりあげた。このアルバムはいま世界でもっとも注目をあつめるバンド「ティナリウェン」の三年ぶりの新作。



CD

## メモリー　細川俊夫作品集 音宇宙Ｘ
### ネクスト・マッシュルーム・プロモーション

メモリー
細川俊夫作品集 音宇宙Ｘ
定価：2800 円（税込）
発売元：フォンテック
http://www.fontec.co.jp/

ヨーロッパを拠点に活動している作曲家・細川俊夫が、１９８０年から２００４年までに作曲した室内楽作品集。演奏は、関西を拠点に活動しているアンサンブル、ネクスト・マッシュルーム・プロモーション（nmp）。nmpは、２００５年に開催したコンサート「細川俊夫～50年のランドスケープ」を企画・演奏し、「第５回佐治敬三賞」を受賞している。

CD

## 祈り～邦人作曲家によるオルガン曲集
### 保田紀子

祈り
～邦人作曲家によるオルガン曲集
演奏：保田紀子（オルガン）
高橋明邦（打楽器）
定価：2800 円＋税
製造・発売元：コジマ録音
http://www.kojimarokuon.com/

松本市音楽文化ホールのオルガニストで、特に現代音楽のスペシャリストとして数々の新作の初演に携わってきた保田紀子による邦人作曲家５人の作品集。このＣＤに収録された作品は、いずれも保田紀子または松本市が委嘱した作品。２００６年４月、ハーモニーホール（松本市音楽文化ホール）での録音。

Book

## 香りでこころとからだを快適に
### 監修：菅原努

ルネッサンス京都21・五感シリーズⅠ
香りでこころとからだを快適に
監修：菅原努
編者：中井吉英・大東肇
装幀：酒井隆志
発行：オフィスエム
定価：1400 円＋税

日本茶と香り、香りの歴史・文化、メディカルアロマテラピー、森林浴、アロマと脳科学まで、香りのもつ力と不思議をやさしく解く。日本文化の原点・京都から、五感（視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚）が及ぼすこころの癒しとからだのメカニズムを自然科学と社会科学で解き明かす「京都ルネッサンス21・五感シリーズ（全５巻）」の第１弾。

# Information

## 日本チェルノブイリ連帯基金（ＪＣＦ）活動紹介

日本チェルノブイリ連帯基金（JCF）は 1991 年 1 月に設立されました。1986 年 4 月 26 日に起きたチェルノブイリ原子力発電所の爆発事故の放射能被災地へ、主に医療を中心として支援活動を展開しています。

支援開始当初のベラルーシは、深刻な経済状況で、白血病など病気の子ども達は、十分に治療を受けることができませんでした。衛生管理もできなかったために、多くの子ども達は感染症などで亡くなっていました。JCF は、現地の医師らと話し合いながらプロジェクトを組み、信州大学などの医療従事者と共に着実な支援活動を続けてきました。

そして 2004 年、活動の支援先はイラクへも広げられました。イラクでは湾岸戦争以後に白血病が急増しています。長期にわたった経済制裁後、新たに起きた戦争で極端に物資が不足、子ども達の治療もままならず、多くのいのちが失われています。

## 日本イラク医療支援ネットワーク（ＪＩＭ―ＮＥＴ）

イラクにおける小児がん（おもに白血病）医療支援のためのネットワーク。医療支援を行っている NGO や関心のある医師たちが、専門性を持ち、過不足のない支援を（イラクの人々が自分たちできちんとした治療ができるようになるまで）継続的に続けることを目指して立ち上げたネットワーク。JCF も構成団体の一員。

website　http://www.jim-net.net/

### ◆ＪＣＦ会費振込口座

| | |
|---|---|
| 賛助会費 | 5,000円 |
| 特別賛助会費 | 30,000円 |
| 事務局ガンバレ会費 | 10,000円 |
| 郵便振替口座番号 | 00560−5−43020 |
| 加入者名 | 日本チェルノブイリ連帯基金 |

### ◆ＪＣＦ／イラク支援振込口座

血液成分分析機購入、医師招聘研修、薬品購入

| | |
|---|---|
| 郵便振替口座番号 | 00520−0−81078 |
| 加入者名 | ＪＣＦ／イラク支援 |



グランドゼロ

第 71 号
発行日　2007 年 3 月 26 日
発行人　鎌田 實
発行所
日本チェルノブイリ連帯基金

イラスト題字　貝原 浩
イラスト　小林裕子
表紙デザイン　酒井隆志

スタッフ　神谷さだ子
布山みな子
協力　オフィスエム
ＪＩＭ―ＮＥＴ
片岡寿美江
印刷　電算印刷

■編集後記

会員さん訪問で池田さんから松本の樹のお話を聞き、道々の木々を見る楽しみが増えました。名前を知ることは木々の物語を知ることでした。訪問団報告も、ベラルーシの、イラクの「名前」のある子どものこととして、何かを伝えてくれることを願っています。今号から表紙のデザインを変え、本誌も少し模様替えしました。ご意見をお待ちします。（布山）

## 販売物紹介

**Book**

・「チェルノブイリからの伝言」
ＪＣＦ 編（オフィスエム）1200 円

・「ぼくたちの見たチェルノブイリ」
松商学園高校放送部 著（オフィスエム）1700 円

・ユーラシア・ブックレット No.21
「ベラルーシ 大地にかかる虹
～日本チェルノブイリ連帯基金の 10 年」
神谷さだ子 著（東洋書店）600 円

**CD**

・「坂田明／ひまわり」
2500 円
JCF 理事長鎌田實が立ち上げた
「がんばらないレーベル」第 1 弾。

・「小室等／ベラルーシの少女」
（8cm シングル盤）1000 円

**ポストカード・セット**

・「JCF post card」：貝原浩（8 枚組）500 円

**映画パンフレット**

・「ナージャの村」800 円
・「アレクセイと泉」800 円

**本橋成一写真集**

本橋成一写真集
・「無限抱擁」
（リトル・モア）3800 円
・「ナージャの村」
（平凡社）3000 円
・「アレクセイと泉」
（小学館）3500 円

●特定非営利活動法人
日本チェルノブイリ連帯基金（ＪＣＦ）
〒 390-0303
長野県松本市浅間温泉 2-12-12
TEL 0263-46-4218　FAX 0263-46-6229
E-mail　jcf@jca.apc.org
Website　http://www.jca.apc.org/jcf/